

次 目

法華經の經旨(中篇)……………	故本多日生
日蓮宗概観(其五)……………	故梶木顯正
人生と法華經(其七)……………	池ノ内三雄
佛教文學に現れたる人間性(上篇)……………	本田義英
法華經講話(第三十三講)……………	小林一郎
記 事	
○本部團報地方教信	○山陽山陰線を巡りて
○寄附金維持及團費誌料領收	

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人運化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮テ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ提出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

法華經の經旨 (中)

故本多日生

これをむづかしく論じて行けば長い話になるが、簡単に概括して、誰でも握つて置かなければならぬといふ所を申述べるならば、法華經の眞理といふものは何であるかと言へば、廣く天地宇宙の全體に對して、在りしものは無くならない、一切の諸法は實在なるものであるといふことをしつかり教へたものである。法華經は即ちそれである。在るものが無くなるといふことはない。無いものが新しく出来るといふことはない。在りしものは永遠の存在であるといふ。この實在不滅の眞理、不生不滅總てものは生ぜず滅せず、本來の存在者であるといふ、諸法實相、世間相常住といふことを教へたものである。そこで在りしものは無くならないといへば、それは石でも瓦でも無くならないけれども、さういふものは問題ではない、在りしものといふ中に、一番大事な問題になつて來るのが靈魂の問題である。靈魂を除いたあとのものは、山でも川でもダイヤモンドでも木でも、そんなものは、靈魂といふものを一つ取つてしまへば問題でないのである。靈魂の無い社會に、ダイヤモンドと、瓦とどれだけ價值が違ふ

か、同じものである。在りしもの、存在といふことを宗教的に、又人間として考へる時に於ては、石でもなければダイヤモンドでもない。たゞ靈魂の問題なのである。さうしてその靈魂がどういふ生活を辿つて存在するか、靈魂だけが幽霊のやうにフワ／＼飛んで行くものかといふ問題は直ぐ起るが、そこに色心不二と言つて、靈魂のある所直ちに相といふものが伴うて、決して幽霊のやうなものではない、そこに人間があり、畜生があり、地獄があり、餓鬼があり、佛様があるといふ、所謂十界の人格的存在といふものを法華經は明にして來た。それを真理の上から説明して來たのである。在りしものは無くない、無かりしものは作られるものではない、一切のもの皆本來の存在である。生ぜず滅せず本來實在のものである。この事を能く佛様は覺り上げた。「唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり、」そこに十界の常住があり、その十界が互に具はり合つて居つて、十如の因果關係に依つて、善を爲しては上に昇る者があり、惡を爲しては下に落ちる者があつて、地獄に落ち行く者もあり、佛に上つて行く者もある。この十界は一切實在の存在者であつて、因果の關係に依つて或は苦しみ、或は樂しみして行く有様のものであるといふことを、真理づけて哲學的基礎の上から、ちやんと宗教の基礎を與へたるものが法華經の教なのである。

その事に就ては如何なる學者でも、如何なる思想家でも、西洋の學問でも、何ものを持つて來ても反對することは出来ない。この釋尊が法華經に説かれたところの、在りしものは無くない、その實際の問題は靈魂である。それが十界の實在となつて現れる。その十界は因果の關係に依つて、惡心を起して惡を爲せば、人間が地獄にも行く、善心を起し善業を積めば、人間も菩薩となり、佛とも成り得るといふ、十界の存在、十界の互に具し合ふこと、因果の關係に依つて或は上り或は下りする、この有様を妙法と名けて、これを法華經の真理と仰いで居るのである。

さういふことは法華經の入口に於て、方便品の「諸法實相、所謂諸法、如是相、如是性、如是體……」といふ所で心得べきことになつて居る。その點は十分に説明を聽いて、法華經のその真理の意味合といふものを頭に入れて置かなければならぬ。併しそれも話をする方の人に、あまり立派な人が無いものであるから、そんな話をし懸けるとまご／＼して、聽いて居つてもわからぬ。「わからぬ筈ぢや、教へ居る坊さんの方も元からわからぬのぢや」といふやうな者が一パイ居るものだから、いくらやつても、はつきりした徹底的な法華經の真理が一般の人に通じないのである。今私がお話するやうな意味合であれば誰でも了解し得ると思ふ。少し思想のわかる者であつたならば、先づ中學校の生徒か女學校を卒業した位の人であれば、今私と言ふところの、一切の存在者は、誰が作ったものでもなく、又決して無くなるものではない、形は變つて行くけれども、それは在りしものが變化して行くだけのものであるといふこの真理は、直ぐわかるだらうと思ふ。

その一つの真理がはつきり抑へられると、そこから今度宗教の基礎が立つて行くのである。お互ひ人

間は善き心もあり、悪しき心もある。縁に依つてこれが動いて行くのである。それを又佛様の方から申せば、憐れな衆生はいろ／＼煩惱の迷ひを起して居るけれども、その奥には立派な佛性を有つて居るから、導きやうに依つては救ひ得られるといふことをお認めになつて、そこで茲に宗教的の關係といふものが起つて来るのである。宗教的の關係といふのは精神的の關係である。精神的の關係といふのは、佛の方からは、あゝ可哀さうな者だ、どうぞ救つてやりたいといふ心持、吾々の方は眼覺めて、まご／＼して居つてはならないと氣が附いて、如何にせば宜いかといふ時に、尊き教があることを發見して、佛の有難さに感激をして、さうして信仰を發して向上を邁らう、上を向いて行かうとする時、仰いで佛の大慈大悲の御顔を拜し、佛は衆生を憐れ、此の子感むべしといふことになる。ちやうど親子が顔と顔を見合せて、お自我偲で言へば、一心に佛を見たてまつらんと欲するといふ、吾々の渴仰の眼が開けて来る。佛の方は、『我諸の衆生を見れば、苦海に没在せり』といふ、その衆生を御覽なされる大慈大悲の慈悲の御眼、一心欲見佛の見と我見諸衆生の見と、この兩方の眼がピッタリと合つた時に、始めて宗教的の接觸といふものを取るのである。そこが精神的關係といふことになつて、『あゝ可哀さうなものだ』『あなたが大慈悲の御佛で在らせられたか』といふ、茲に精神的の結合といふものが起る。所謂レリジョン（宗教）といふ西洋の言葉はその結付きを言ふのである。言葉はそれだけであるけれども、その慈悲の奥の奥には無限の佛の力が籠つて居るし、一心欲見佛の渴仰の吾々の信念の中には吾々の全

精神が籠つて居るが故に、その兩方の心と心とが合ふといふ、茲に何とも言ひ得られない功德を生じ、救ひの力が發生して行くのである。

その場合に、その救つて下さる御佛はどういふ方であるかといふ時に、この天地法界に於て絶對無上の完全なる方であるといふことが信せられて来るのである。それは本佛と申して居る、御名は釋迦牟尼佛であるが、その奥の本體は限り無きところの本佛であり、その本佛としての釋迦如來が智慧に於ては一切覺りたまはざる所無く、上に眞理を捉へて居るのみでなく、下に衆生を救ふべき方法に於ては一切御承知になつて居る。この者を如何にして救ふべきか、斯る方法を用ふればこれを救ひ得るといふ、その濟度の方法に就ても一切御承知になつて居る。ちやうど良き醫者が、醫學上の病理の研究、藥の研究といふものを完全に知り得て居る上に、澤山の病人を扱つて、長き經驗に依つて、一たび診斷をする時には忽ち『この病氣は斯ういふ原因から起つて、今の状態は斯うである、斯ういふ方法を執れば、これは癒る。餘程難病だけれども救ひ得る途がある』といふことを、學理の方に於ても應用の方に於ても兩方の智慧を完備して居るが如く、一切衆生濟度の上に缺目の無い完全なる力を有つて居るもの、これを本佛釋迦如來と申すのである。阿彌陀様が偉いとか偉くないとか、そんな問題ではない。阿彌陀様の四十八願などは朝飯前の話である。お釋迦様はそんな事は百も二百も御承知で、時々阿彌陀様の方から電話で教へて貰はなければわからないといふやうなものではない。お釋迦様の覺の一小波動が憐れな婆

さんに對して話をする時分に、あの阿彌陀様のやうなことを善巧方便として説き出し給ふたものであつて、一切經七千餘卷に現れて居る一切の教は、獨り釋迦牟尼佛の御覺の智慧より出でたる働きに外ならぬものである。

さうしてその慈悲の御働きを窺へば、これ亦一切衆生を平等に愛し給ふ大きな廣い慈悲であるけれども、又それが一人々に及んで、大勢だから手が廻らぬといふやうなことはない。ちやうど太陽の光のやうなものである。電燈の光であれば、あまり部屋が大き過ぎるか、人数が多いといへば、餘程大きな電燈を點けても隅々は暗いとか、人の陰になつて居つて暗いといふことがあるが、太陽の光になるとズツと全體を照すのみでなく、人各々の手許を照す上に於て、針仕事をして居る者も、書物を読んで居る者も、總ての人々の手許に光明を與へて満足せしむるが如く、廣く大きな慈悲であつて、而も個人々々の手許に於て完全な救済を現すところの慈悲である。雨の廣く一切の草木を潤すが如く、一たび雨が降れば、小さな葉の一つまでもその潤ひを受ける。これが人が行つて水を掛けるのであつたらなかういふのかぬ。夏旱天が続いて草木が枯れるからといつて水を掛けてやる、掛けても掛けても却つて枯れるといふのは、完全に水が及ばないからである。併し一たび雨が降れば大きな木も小さな草も一遍に皆な蘇へるが如きものである。さういふ風に大きくして而も適切に、大きな木にも小さな草にも及ぶところの慈悲である。阿彌陀様は小さな草だけ救ふ、お釋迦様は大きな木だけ救ふ、そんなけちな事を言つ

て宗旨を立てるといふことは間違つて居る。雨の潤ひの如く、遍く大きな草も小さな草も各々その所を得るのである。佛の慈悲はさういふ風に輝いて居るのが一切經の上に見えて居る所であつて、さうして又事實釋迦如來の世にお在でなざる時の救済の有様もさうであつた。舍利弗、迦旃延等の大哲學者、大宗教家でも皆釋迦に依つて救はれ、無智文盲の名も無き婦人も釋迦に依つて導かれたものである。如何なる智慧ある者も、如何なる愚かな者も救はれざる者は無い。國王大臣も掌を合せ、非人乞食も仰ぎ瞻る。如何なる者も皆な釋迦牟尼の教化の中に感激を懐いたといふことは隠れない事實である。今日もやはりさうであつて、日本の歴史で考へても、一番賢いと思はれるやうな聖德太子でも、傳教大師でも、弘法大師でも、菅原道實でも、水戸光圀でも、如何なる偉い人でも、南無釋迦牟尼佛と合掌禮拜し、又名も無き田舎の破家に住んで居る爺、婆も、涙を以て御佛に合掌禮拜したのである。故に釋迦牟尼の慈悲は全體を照し全體を救ふて、而も各々のその分に適したる救済を與へたといふ事實は明瞭な事である。

さういふ風に佛様の智慧に就ては原理に於ても應用に於ても、慈悲に就ては廣く全體に於ても個々に於ても、遍く行き渡るといふ不思議な御働きをなされた。さうしてこの慈悲の心は必ず働きを喚出するものであつて、優しいからじつとしては居れないといふことになる。必ず親切といふものがあつたならば働き出すものである。親にしても子供が可愛いと思つたならば朝寝はして居ない。早く起きて學校へ行

く支度をしてやらう、或は商賣を屬んで子供の爲に儲けて置いてやらう、あゝモウ學校から歸つて來る頃だから薯でも蒸かして置いてやらう……何か働きといふものを産出す。親切は必ず活動を喚起するものである。非常に親切だけれども、何にもしないで寝て居る、子供が朝起きて御飯を食べようと思つてもお湯が沸いて居ない、あゝ可哀さうだと思つて居る。學校から歸つて來ても何にも食べる物が無い、あゝ可哀さうだと思つて居る……さういふ親といふものは無い。必ず慈悲の心は活動を起す。佛が一切衆生を我が子として感れみ給ふその活動といふものは間斷無く、毎に自らは是の念を作す、何を以てかといふことになつて、この娑婆世界のみではない、娑婆世界は言ふまでもなく、廣く十方法界に及んで、百千萬億那由佉阿僧祇の國に於ても衆生を導利すと言つて、娑婆世界どころではない、あらゆる世界の無邊の衆生にも慈悲の働きを現はすものである。そこで一つや二つの身では間に合はぬからして、分身散影といつて、無數に身を分けて盡十方法界に活躍すること、天の一月萬水に影を宿すが如く、夜も晝も間斷無くこの廣い全體に對して、慈悲の精神に促されて衆生濟度の活動を續ける、「所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず」と仰せられた、これが法華經の宗教的の教であるといふことを考へなければならぬ。

この本佛の大慈大悲に對する時、どうしても情操感激といふものが起らざるを得ないのである。方便品に説かれたやうに、一切衆生は苦しみを以て苦しみを棄てんとして居る。苦しいからといつて苦を紛らす爲に酒を飲む、酒を飲んだら頭が痛くなる、頭が痛くなれば女房と喧嘩する、さうして女房が不

貞くさつたといふやうな譯で、次から次と苦しみといふものを辿つて行くのである。血を以て血を洗はんとするが如く、インキが濡れた所にインキで絞つた雑巾を持つて來て拭くやうな譯で、益々擴がつてインキだらけになつてしまふ。女中に疊が積まないから拭いて呉れと言つたところが、よごれた雑巾を持つて來て拭いた爲に、却つて眞黒くなつてしまつたといふやうなやり方を人間は始終して居る。小さい子供に言ふて御覽なさい。お茶が濡れたからお拭きなさいと言つて拭ければ拭かせるほどだん／＼積な

くしてしまふ。人間の苦しみを除かんとする有様は恰もこれに似て居る。

大勢の佛及與び斷苦の法を求めず、深く諸の邪見に入りて苦を以て苦を捨てんと欲す、是の衆生の爲の故に而も大悲の心を起しき。

と方便品に佛は説かれた。本當の力のある佛を頼りにせずして、つまらないものを味方にし、又眞に苦しみを打切る尊き方法に依らずして、一時の間に合せを以て苦しみを遁れようとして居る。この衆生の有様に對して佛は大悲の心を起して、あゝ可哀さうなものだと思つたと言はれるのである。この教を聴けば、「あゝさういふ譯でありましたか、洵に有難いことでございます」と、こちらはどうしても感激しなければならぬ。仰しやる通り吾々はさういふつまらない事をして居りましたといふことになるのが法華經の信仰といふものである。(次續)

日蓮宗概観

(其五)

故 梶 木 顯 正

(三) 聖祖の重なる外護者

(1) 富木播磨守胤繼 (永仁七年三月廿日寂) 五良左衛門尉、字は常忍と云ふ。(頂師の義父なり) 下總若宮の邑主、深く聖祖に歸依し解行共に高く、聖祖滅後得度剃髮して名を常修院日常と改め館を以て寺とす、即ち今の法華經寺之れなり、聖祖を第一祖とし自ら第二祖となる。胤繼聖祖御遊學中その學資を贈ると傳ふ。胤繼建治二年母の遺骨を身延に奉じ詣りて入道す、歸途武州淺草金龍山(今の淺草觀音)の寂海法印を論破す、寂海名を日寂と改め寺を改宗せしめんとせしも寺僧等聽かず、故に黄金の觀音像を

奉じて寺を出で別に橋場に庵を構へて祭る、即ち今の長昌寺是れなり、依つて以後觀音は長昌寺に在つて淺草寺には無しと云ふ。

(2) 工藤左近丞吉隆 天津の城主たり、康元元年聖化に浴して檀徒と爲る。文永元年十一月十一日聖祖を迎へんとして、東條景信の爲め小松原法難に墮る。聖祖その法難を賞し法號を妙隆院日玉と賜ひ親しく大僧の禮を以つて鏡忍坊と共に葬り玉ふ。時に妻懷妊中なれば吉隆死に望んで曰く「若し男子なれば大聖人の弟子と爲せ」と、之れ後の刑部阿闍梨日隆上人なり。日隆父の邸を寺と爲す天津妙隆寺是なり。

(3) 遺體左衛門尉爲盛

(康永二年八月十五日寂) 北面

の武士にして承久三年執權北條義時、順德天皇を佐波に流し奉るや之れに供奉して佐波に至る。帝崩御の後日夜念佛三昧に入つて其の冥福に供ふ、文永八年聖祖佐波に流滴さるゝや彌陀の佛敵なりとて聖人を害せんとし却つて聖人の爲に説破せられ、權門を捨て本化の教風に歸し、夫妻共に厚く聖祖を供養す。阿佛房日得、妻を千日尼と云ふ共に聖人の呼び玉ふ處なり。後老嫗を以つて佐波より三度身延に聖祖を訪ふと、死後子盛綱、聖人の弟子となり家を改めて寺となす、即ち中老僧の一人たる日滿上人之れなり。

(4) 本田左衛門尉乘明

三善康連の子なり。越中及常陸

那珂を領し問註所に出仕し、子日高・日明の二人を聖祖に投せらる。乘明本化の教觀を明らかに高祖より名を乘明妙日と賜ふ。「三大秘法抄」を授けらる。

(5) 大學三郎

比企氏、能本と云ふ。京都に生る、世

世儒官たり、順德天皇に愛せらる。後鎌倉に仕ふ。文應年中聖祖に歸依し次で家を寺とす、今の比企妙本寺之れなり。聖祖より法號を本行院日學と賜ふ。聖人立正安國論を著し玉ふ時、その文章字句を能本に誇り玉ふと云ふ。

(6) 曾谷教信 二郎兵衛と稱す、皇后宮大進にして清原行清の裔なり。下總曾谷に住す、富木・太田と同じ心して共に聖祖勉學の資を供せりと云ふ。後入道して法蓮日禮と云ふ。日透・日源は其の子なり。

(7) 池上宗仲

右衛門大夫志と云ふ。池上莊左衛門太

夫の子なり、建長年中兄宗長と共に聖祖に同心す、父悦ばずして二人勘氣を蒙るに至る、然も信念愈々堅く兄弟終に父を化す。次で自邸の傍に一坊を興し日昭上人を請ふて法義を聴く、後ち大進阿闍梨(道)代り日朗・日向等も代り來る。宗仲入道して朗賢日宗と云ふ。弘安五年聖祖宗仲の宅に入滅し玉ふや邸を寺と爲し本門寺と名く。

(8) 波木井六良左衛門實長 南部實長とも云ふ。聖祖佐渡より歸り玉ふや身延山を獻じて聖人棲禪の道場に充てらる。甲州南部光行の子なり波木井郷に居す、正嘉年中聖祖に歸伏す。弘安四年始めて堂宇を建つ即ち久遠寺之れなり、聖祖滅後入道して日圓と云ふ、(今の南部男) (實長の子次郎は元弘の亂に大塔ノ宮に歸り、吉野落城後捕はれて、永仁二年十二月十三日京都六條河原に斬せらる。)

(9) 四條金吾頼基 中務三郎左衛門尉と云ふ。江馬遠江守光時の臣なり、醫を業とす。建長年中池上氏等と共に禪を擲て聖祖に歸し外護大いに務む。建治三年日進龍象坊と法論の節護衛の爲に加はる、然るに同僚之を以つて主人江馬氏に譏す、因て勳氣を受け所領を沒收さるゝに至れり。聖人その決定信を賞し代つて「頼基陳狀」を書し江馬氏に呈せしむ。文永八年聖祖の龍口法難に殉せんとし、又翌九年春北條時輔の亂に際し主家の難に殉せんとし。江馬氏は頼基の

(14) 藤原實隆
等は最も信念強盛にして本化の極越として能く聖祖門下を外護し、深く教風宣揚に力を與へたる人々なり。繁きが故に今は略す。

第四章 聖祖滅後門下の動勢

聖祖の滅後、宗門の經營發展は六老僧が中心となつて行はれる譯けであるが、聖人の三年忌を迎へて身延では波木井實長と六老僧の間に輪番制の事から問題を起し、終に日興上人は意見合はずして離山のやむなきに至り、日向上人は身延第二主となる關係より茂原を出る事に基因して、茂原門流、身延門流と云ふ名が出来た。

日興上人は實長と絶交した關係から孤立の姿となつて、自然的に一方の門戸を建てなければならぬ状態と成り、終に後世分派の兆を見るに至つたのである。兩山の日興上人は此の間に日像・日輪・日善・

誠忠に感じて舊に倍する縁を以つて遇したりと云ふ後に入道して收玄院日頼と稱す。兄弟四人共に聖人の熱烈なる外護者なりと傳ふ。今はその屋敷跡を寺と爲せり。

(10) 南條時光 上野七郎次郎と稱す。北條執權の近臣なり、富士上野を領す。父兵衛七郎の頃より聖祖に歸依す、正應年中日興の身延離山と共に時光地を布施し迎へて大石寺を建つ、日興、北山重須の本門寺を開き本門戒壇の根元地と爲す。

(11) 江川吉久 太郎左衛門尉と云ふ。聖祖遊學中の舊知たり、伊豆葦山に住し本化の極越となる。後入道して日久と稱す、吉久の邸、聖祖火防の棟札を掛く七百年の今日尙當時の家そのまゝに殿たり。世々葦山に代官を勤む、中古本立寺を創建せり。幕末の傑士江川坦庵は實にその裔なり。

(12) 金原法橋 (金原明善翁の祖なり)
(13) 秋本太郎兵衛

日範・日印・日行・朗慶・等を得て門戸は頗る榮へて行つた。斯の如くして六上足各々門葉が榮へて行くに随つて、何時とは無く日興上人系の者は「朗門流」、日興上人の門下は「興門流」と、誰れ云ふとな言ふに至つた。抑も後世分派を爲した第一原因はこの師弟門葉の關係が其の根本基因である事は何人も認むる所である。

(一) 四方遊化と本化道場の建立

日興上人の甲斐・駿河傳道 上人病の爲に伊豆熱海に療養して日目上人を弟子とし、次で駿州岩本に折伏弘通を爲し、更に甲州に布教して日華・日仙・日妙・日傳等を得玉ふ。(興師は富士に大石寺を建て永仁六年北山重頼須談所なり) 興師の滅後正應二年の冬その遺命に依り日目上人は七十有四歳の老軀を提げて日尊・日郷を伴ひ京都に天奏の爲め發足し、途上美濃の垂井に至つて病の爲に大志を果たさずして遷化す、因つて

遺骸を鳥部山に葬る。

日蓮上人の弘通 武州鎌倉の法明寺（今の鎌倉）を改

宗せしめ、次で碑文谷の法華寺を開く。

日門上人 上人は奥羽仙台に弘通して大仙寺を開く。

後ち寺號を改めて孝勝寺と云ふ。

日辨上人 上人は上總鷺山寺に住す、弟子の日忍を伴

ひ常陸に願成寺・妙法寺を建て、磐城に本行寺・安

立寺を開き更に北へ教戦を張り、伊具郡櫻村に至

つて異教徒の爲に利害せらる。時に年七十三歳なり

と云ふ。

日華上人 上人は興師の高弟日門上人の弟子にして、

學を興師に就て重須談所に學ぶ。正安元年の秋談所

の席に情容を示して興師の勘氣破門を蒙り、爾後十

二年間山に寝ね野に起きて全く文字通りの捨身弘教

三十六ヶ寺の堂塔を建つ。其の足跡は西は丹波・出

雲・石見・安藝等、東は伊豆北は下野・奥州等に至

れり。後年この法勳に依つて破門を許さる。

日華・日仙兩上人（興師の直）等は元享年中四國に渡り弘
教寺を建つ。かやうにして聖祖の滅後は各自その
門業の發展と共に教風益々上り、一方には教學の研
究亦盛んにして切磋琢磨の火花を散せり。

(二) 本述勝劣と一致の論争

これは法華經の教相判釋（學問上からする）から起つ
た問題であつて、聖祖の滅後門下の學問的法華經の
見解が此の二つの流れに分れて來た。其の代表的の
人は、大體六老僧の中では「日門上人」は「一致」と云
ふのであり、「日辨上人」は「勝劣」と云ふ。中老僧で
は「日華上人」及「日辨上人」等は法華本述勝劣主義を
執り、勝門不讀説をさへ主張して身延の第二世日門
上人と（日門は本述一）乾元元年頃盛んに論争をやつて
居る。此の論争から門下が二つに區別されて來て一
方を「一致派」と云ひ、一方を「勝劣派」と呼んで
兩者共に一歩も譲らずして後世に來た譯である。此

の論義は明治の初年まで續いた。次で後代に至るに
随ひ勝劣派の中に於て又分派を生じ、一致派にも分
派が出來て來たのであつた。その事には種々理由の
ある事ではあるが後の章に譲ることとする。

(三) 上代に於ける宗門の制度

身延・比企・池上・中山等の大寺の住職は師弟相
續といふ事にされて居た。又其の住職は必ず貫首と
云ふ名で呼び、末寺の弟子達は皆この貫首の附弟と
云ふ事になつてゐた、故に其の附弟達は本山寺に起
居し學頭職と云ふがあつて其れに依つてそれ／＼教
育を受けたものである。又之れ等附弟達が布教傳道
に依つて寺を建てれば其れは寺も信徒も皆本山寺の
所屬としたのである。故に本山寺はその末寺・信徒
間に起つた問題は一切之を審議し、同時に住職の進
退權を持つて居たのであつた。斯くて諸本山は教義
・制度等に依つて各々門流の別を立て、各々競ふて

其の特色を發揮し弘通傳道に務めたのである。され
ば門下は斯うした制度に因つて各地に急速なる勢ひ
で發展して行つたのであつた。

(四) 日華上人と京都の弘通

日華上人は興師の弟子にして學を聖祖と興師に
學んだのである。（聖祖一代の宿願たる天樂を遂げ玉はすして
故に像師は聖祖と興師の命を尊びて、大聖人十三同忌）永仁元年
春入洛の志を遂げんと、伊東・小湊の聖跡より北國
佐渡を巡拜して若狹より越前に出で、大道に妙泰寺
を開き江州を経て京都に入り、永仁二年四月（六才）
廿八日王城の東門に帝都の開教を宣言し玉ふた。次
で洛北松ヶ崎の天台宗歡喜寺を改宗せしめ、徳治元
年には此處に大學傳道をやつて全村を悉く改宗せ
しめ、洛の南西の鷄冠井眞言寺を歸伏し、延慶三年
には深神の眞言宗極樂寺を改宗せしめ、更に嵯峨大
覺寺の宮を弟子とさる名を妙實上人と云ふ。（大覺寺上

人は後醍醐天皇の王子にして鎌倉の北條を亡して王政を復古せんとするの志な懐かれる折柄、日蓮上人の日蓮主義、王佛冥合論を聞かされ、本化の教風に依つて人心を救め復古の大業を行はんとして、入門せられたと云ふ。妙實上人はち爾前に布教し終に備前法華を開拓する。今の備前法華(元亨)元亨元年には後醍醐天皇より地を賜ひ妙顯寺を建つ、京都に於ける我宗道場の初なり。

建武四年四月には帝又勅願所の輪旨を賜ふ。(同く建武四年京都二條に天目上人の門下で本門寺を建つ、これ京都に於ける本宗第二の道場なり。京都本宗十六本山(但し現在) 一、妙蓮寺・二、本國寺・三、立本寺・四、本隆寺・五、村雲瑞龍寺・六、本法寺・七、妙覺寺・八、本満寺・九、本漸寺・十、妙満寺・十一、本徳寺・十二、頂妙寺・十三、要法寺・十四、寂光寺・十五、妙泉寺・十六、妙典寺なり。元廿一ヶ本山あつたが、天文法亂の時焼失して十六本山となつたのである。

斯くして之れ等の寺を根本として各々不惜身命の弘通を爲す、爲に本化の教風益々高く廣く天下に流布するに至つた。延文三年朝廷より聖祖及日朝・日

日蓮等あり。京都妙満寺(明徳元年建立す) 靜岡見付の玄妙寺、會津の妙法寺、品川本光寺、鎌倉飯田本興寺、千葉の本圓寺は皆その教化の舊跡である。上人天奏の時朝廷より二位僧都の位階を賜ふ。

猶京都妙満寺十八世日蓮上人の弟子に心了院日泰上人あり、元里見の軍師にして土氣十八萬石の城主酒井小太郎定隆を教化し、領内を一夜に改宗せしむ寺を建つる事三百餘之を上總の七里法華と云ふ。

この門流に慶長年間上總に常樂院日經上人出で大いに四方に法鼓を鳴し京都妙満寺の貫首となるや日蓮聖人の尊像(ハッキ)を負つて街頭に邪宗を折伏し、家康の恨を買つて師弟六人六條河原に耳切り鼻切りの惨刑に遭ふ、然れ共尚道念火の如く燃え刑後全國に弘通して五十三ヶ寺を建立す。今の顯本法華宗是れなり。

(五) 妙満寺日什と當時門下の狀況

嘉慶年間元天台宗にして叡山の學頭たりし玄妙能化(奥州會津に生る)は、日蓮宗に改宗し(玄妙六十七歳の時)先づ下總中山に至り、真間を訪ねて日蓮聖人の法義を研究せんとせしも、當時の宗内は一致勝劣から附弟嫡弟の争ひ烈しく、爲に聖祖の正統を知る能はず、故に自ら日蓮大聖人に歸して直授法水を吸み奉らん」と、名を日什と改め「受持分絶」則ち信仰の頹廢を嘆き、直ちに法華經と聖祖の遺文を師として起ち、京都堀川に老軀を提げて弘通の旗を上げられたのである。(上人は正和三年二月廿八日會津に生) 六十七歳の老齡を以つて京都と奥州の間を往復し天奏三度、武家諫曉三度に及ぶ。(上人は天台の叡山を下つて會津(改)弟子に日養・日全・日珍・日金・日仁・日妙

念告

小林一郎先生の開目鈔拜講は來る九月九日(第二水曜)晚七時より開始さる。何事を差置いても是非こればかりは來聽さるべきである。

統一會館

講本準備あり一部金二十五錢

電話牛込五三三六番

人生と法華經 (其七)

池ノ内三雄

懺悔篇 第一

八、目醒たる跡に

かくして宇宙の諸法實相、諸法實相の開顯としての眞善美の本質。この眞善美の法體と妙法蓮華經の教理。妙法蓮華經と、本門の本尊戒壇、題目の三大秘法。三大秘法と眞善美。眞善美と日本國體と妙法蓮華經。妙法蓮華經と太陽を首主とする大自然と人類文化等をあらゆる見地から考察して、日本國體の眞義と法華經の大眞理との融合統一の世界觀とを、明白に把握認識し得た私は、茲に十年間の共產主義の妄想を餘すところなく清算し眞實に人類の公道を發見し得たのである。迷ひも又悟りの因とはこのことであらうと思ふ。迷ひなければ悟りもなく、悟りなければ又迷ひもないであらう。煩惱は即ち菩提である。これ故に釋尊も「調達は我が師なり」と教へ宣はせられたのであらう。〇〇主義も又私にとつては悟りの因であつた。若し私にして、自己の周囲の貧しい同胞の惨めさに義憤の念も起さず、不合理な社會に對しても何等

公憤をも感ぜずして、〇〇にも加盟することなかつたならば、私もこれ程深刻に宇宙の實相や、國家社會や、人生を宗教に對して考へ及ぼしもしなかつたであらう。かうして國法に背いてかみ陛下には大の不忠の臣となり、親に對してはこの上ない不孝の子となつて、牢獄の生活にまで身を墮さなかつたならば、恐らくこの開悟もなかつたであらう。それに就いて思ひ出すのは勝鬘經のことである。即ち勝鬘經の如來眞子章の中に

「勝鬘 佛に白して言さく、三種の善男子善女人甚深の義に於て、自の毀傷を離れて大功德を生じ大乘の道に入るなり。何等をか三と爲す。謂はく若しくは善男子善女人隨順の法智を成就すると、若しくは善男子善女人諸々の深法に於て、自ら了知せずして仰いで世尊を推し奉り我が境界にあらす唯だ佛の所知なりと云ふ、是を善男子善女人仰いで如來を推し奉ると名づく。此の善男子善女人を除き己つて、諸々の餘の衆生の諸々の深法に於て、正法を堅著し、忘説し違背して、諸々の外道を習ひ、種

子を腐敗する者は當に王力と天、龍、鬼神の力を以て而も之を調伏すべし」(田中萬宗著勝鬘經講話二八二)

と説かれてあることである。勝鬘經のこの章の終りの句のことに就いて、山川智應博士は、日蓮聖人傳十講の中で次の如く解説されてゐる。即ち

「勝鬘經といふものは阿輸舍國友稱王の夫人に勝鬘といふ人があつた、この人が女ながらに佛法の護持をして國中を大乘を以て教化するのみならず「攝受」「折伏」といふことを説いた「攝受」とは一切衆生の善惡をわかつた悲愍して救ふことで「折伏」とは、慈悲を以て一切衆生の惡を指彈して、之を改めしめることである。そして個人的利益を思ふのはいけない。個人的解説、個人的安心の佛教は眞の佛教ではないといふことを説いたお經である。この經の中に「佛種を根數するもの」即ち眞の佛教の精神——人類の眞の性質たる佛性の根本——を根から敗らすやうな人間。生存競争の爲めに佛性の根本を破壊してしまふ人間(私曰く、私のやうな〇〇主義者や〇〇主義者のこと)そいふ人間には、最早普通の慈悲攝受といふことでは到底その心を眞に廻らすことは出来ない。それを廻らすに就いては最後のあるものが要る。それは何だと云へば即ち此の經に「王力及び天龍力を以て

強伏す」と説いてある。「王力はこれ國家の力、天龍力とはこれ正法擁護の靈界の力でこの「幽顯の勢力」を以てこれを強く折伏する外はない。即ち國家の力と眞理の力とを融一したものだ蓮主義の本門戒壇の思想の傾向あるもので、所謂第三帝國の思想と類系のそれで」云々

(日蓮聖人傳十講一七六)

とある。まつたくこれである。山川博士の語句の中には多少強調しすぎてゐる點もあるやう思はれるがまつたくこの通りである。私がかうして、日本臣民と生れ乍ら「宗教は阿片なり」など云ふ妄語に迷はされ、危く佛性の根本を腐らせやうとし、又光輝ある日本國體を非道にも覆さんなどと亂暴極まる國體破壊者の群に入り國法の違反者として、こゝに王力の制裁が顯はれ、又一方には、私の母の吾が子可愛さの一念から正法護持の大棟領たる日蓮聖人にその御助力を乞ふて改心させやうと祈願せられたことは、何といふ不可思議な因縁であらう。今日の私の開悟するに至つたのはまつたく私の自力更生ではないのである。それは實に、王力、天、龍、鬼神の妙力によつて、私の邪念が木葉微塵に粉碎されたからである。私の心はまつたくこの大妙力の爲めに淨化され調伏されたのである。

佛教に於て、天とは、天然の眞理に對して喜樂の心をもつものゝことを名け、龍とは那個といつて、これに惡龍、善龍

があつて、善説は歸佛の人を護り、惡龍はこれに反すると云はれ、鬼神とは「新修略註日蓮聖人遺文集」の中の「日向日記御講聞書」(二二二)に、「諸鬼神等揚聲大叫の事」といふ項の中に、

「仰に云く、諸鬼神等と云ふは親類部類等を鬼神と云ふなり」

と書かれてあれば血族等の情愛が即ち鬼神の力である。又又この鬼神の類に鬼子母神といふのがある。これは千人の鬼子の母なるが故に鬼子母神と云ふのがあるさうであるが、これは母性愛の權化だ。私の母もまづたく鬼子母神の化身のやうな慈愛に満ちた母性愛の權化であると思ふ。すべてこれら等天龍八部の衆は皆正法護持の靈界の妙力である。實にも佛種根柢の輩を強伏するものは王力と、眞理の力と、血族の眞實の愛に依る外はないのである。さしも頑迷であつた私も遂に正法護持の力の前にいみじくも調伏されたのであつた。調伏されて了つて、妙法華經に歸依して見ればこれはまア何んと我が身に契合して居たことであらう。さきの「良醫の狂兒」の毒量品の譬論はまづたく私にとつては奇蹟であつた。私は最早、法華經より他に信仰すべき何物をも持つて居ない。ここに至つて頼みれば今更乍らに、大聖大恩教主、釋迦牟尼佛の大慈悲心と宏大無邊の皇國の御恩と、末法五濁の惡世の大良導師、日蓮大聖人の御慈悲と、三十餘年一日の如く

私を慈しみ給へるわが母上の御恩と、この主師親國の四大恩の鴻大なるに感激せざるを得ないのである。

若し十方諸宗の善知識等、私の本化立正農法を聞いて打ち驚き、大天か亞流かなんぞの如くのしり、或は又過去の日本〇〇黨、並びに國際〇〇黨の如何なる義りが起らうとも最早私には問題ではない。そしるなら説るがよい、私は私をそしる者を見つけ次第正法を護持して、これを折伏してやるまでのことだ。今や私の力は天龍力とならなければならぬ。あざけるならあざけるがよい、私はそのあざける者を見つけ次第天龍力となつて強伏してやるまでのことだ。日本の正しい國體の大道を、法華經の大眞理で照し乍ら進軍するならば必ず勝利は我等のものである。それが天壤無窮の所謂であり日本民族の歴史的使命の絶對性であり、日本國民の任務なのだ。私はこの大信念の上にも正しい人間としての生くべき一條の白道を見出したのである。私はまづしぐらに、その大白道を突進して行かうと思ふ。

南無釋迦牟尼佛

南無妙法蓮華經

南無釋迦牟尼佛

南無妙法蓮華經

私は今まづたく、心から祈り、そして天にも地にも恥づるところなく、法華經の信仰を語ることが出来ると思ふ。それ

は法華經壽量品の久遠實成の釋迦牟尼佛に於てはじめて、眞善美を人格化した全人類の師表を見出し、自己をして亦この師表の全人格にまで高め得らるゝといふ人間の恩恵を發見し得たからである。私の歸依渴仰の對象は即ちこの久遠實成の釋迦牟尼佛である。この久遠實成無作三身の大恩教主釋迦牟尼佛を光顯した法華經の偉大なる教理は、あらゆる哲學の父となり、あらゆる宗教の母となり得る内容を持つて、一切の精神文化を統一し包容する。この偉大なる法華經壽量品の久遠實成の釋迦牟尼佛こそ、私の本尊である。

かつては「宗教は阿片である」と思つてゐた宗教の中にこの偉大なる妙法蓮華經のあることは私は知らなかつた。法華經こそは實に佛教の心髓であると私は確信する。佛滅後の私達下凡の衆生にとつて、佛教信仰の中心をどの經典に依るかといふことは、信仰上非常に重要なことである。この依經の相違が本尊の相違となり、修業の相違となり、生活と信仰との融合が叫ばれてゐる今日、私達の信仰問題と大いに關係を持つて来るものである。だが私は今、最爲第一の妙法蓮華經を得、一閻浮提第一の本尊に近づくことが出来たのである。

私は今こそ全く、慈愛に満ちた私の母のために心から感謝を捧げなければならぬ。私の母は、どんなに私の改心を祈つてゐたことであらう。私の母の一心は、とうとう頭な私を改心させて私をしてほんとうの自己を見出させてくれたのであ

る。思へば私の母は私にとつてはまづたくマリヤにも勝る聖母であり、摩訶摩耶にも勝る慈母であり、それと同時に最も尊き師であつた。

私は母の爲めに、まづたく眞人間にならなければならぬ。

私は母の爲めに、聖人成佛のまことを表はさなければならぬ。

偉大なる母性愛の祝福のために。

最尊なる妙法蓮華經のために。

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、合掌



佛敎文學に現れたる人間性 (上篇)

文學博士 本田 義 英

緒 言

茲で言ふ「佛敎文學」といふのは、現代文藝家の手になる佛敎を素材にした小説とか、詩歌を指して言つてゐるのではなく、所謂「如是我聞」の四字を以つて始まつてゐる釋尊以來の佛説經典、並に佛敎聖典、それを總稱して言ふのである。従つてこの話も本當に赤裸々な題に代へるならば「佛敎研究資料」の中で人間の本质といふものが、どういふ風に取扱はれてゐるかといふ話」かういつた意味のものであることを豫め御諒承を願つておく。

人間性に對する三つの見方

が一つの問題となつて起つて來る。

次には二元であるけれども、その二元的な人間を抽象化して、假りに一元に歸し、單なる理論的方面から一元視して人間性の問題を考へてみるべきかどうか――

又次には、この男女といふもの、外に、男女といふこの別々な人間を支配し統一する生きた人間、言ひ換へれば神といふやうなものが別にあつて、その神とも言ふべき人間の本质を人間性と叫ぶべきであるか。

さしあたりこの三つ位の疑問が起つて來るのである。この問題については支那でも日本でも昔から相當大視されて、明かに男女といふ問題で扱つてはをらぬが、この人間性の問題についてはどう解決すべきかといふことで、支那、日本の各聖人が相當悩まされたあとが残つて居るのである。

殊に印度に於ては、この人間性の問題については

然らば今私は「人間性」とか、「人間の本质」とかいふ文字を用ひて、一口に「人間」と言つてしまつたが、この人間とはどんなものか、この世の中に住む人間といふものは、男とか女とか老人とか若者とか、必ず何等かの形容詞のついた人間であつたゞ人間と言つたつてわからぬのであるから、一番わかり易い男女相對觀の上から人間性について少しく觸れてみる。

第一に一體男と女といふものは、生理的心理的に相異つてゐることを認めざるを得ないのであるから、人間性といふものも、男の人間性と女の人間性の二つを認めなければならぬ。そこでこの二元的な考へ

非常に色々な學者や聖人が苦しんだのである。

印度で佛敎が生れたと殆ど同時代に數論といふ學派がある。

一時は佛敎と同じやうに印度國內を風靡し、佛敎にも相當影響を與へてゐる。

これは印度で一時非常な勢で思想界を風靡した學派であるが、その數論學派に於ては、この男女の人間性といふものを前記三つの問題と略々似た立場で扱つてゐる。

即ち數論では第一の、男と女といふものを二元的に考へる考へ方、それが根本的立場である。

しかし數論の目的とするところは、女といふものは男といふ人間によつて包攝せられ、支配せられ、つまり男といふ人間を抽象化して、そこに人間性といふものを認める。換言すれば、男性的な人間――男に限つた事ではないが――を認めて、その中に女といふ人間性を包攝するといふやうな立場から、そ

ここに遂には男も女も一元に歸して終ふといふことを理論的に説いて居る。

けれども、これは理論であつて、一般の人情の許すところではないのであるから、數論のあとにはすぐ數論瑜伽といふ學派が生れてをり、數論は理論を喜んだが、數論瑜伽は實踐を目的として居つて、而して實踐派の立場から、理論だけでは人間は満足されないとして、神の問題を考へ出し、神によつてこの男女の問題を説かうとした。

丁度それは先程の三つの問題中の第三の問題に多少似て居るのである。

しかし乍らその出發點が依然數論を立場としてゐるのであつて、男尊女卑の面影が相變らず殘されてゐる。兎に角人間性の問題では古來幾千年間人類が苦しんで來たのである。

お釋迦様は男尊女卑?

内に流れ込んで來た時代もあつたのである。

例へば智度論(龍樹菩薩が般若經を註釋されたもので百卷よりなる大部のもの)の中に、かういふことが出來てゐる。

佛様のことを釋尊といつてよし、善逝ともいつてよく、或は世間解ともいつてよいといふ風に十號のことについて註釋されてゐるところもあるが、その中で、調御丈夫といふことも佛様の十號の一であるといふことがあつて、これに對して佛様は女人をも化導せられ、教化せられたに拘らず、女人調御といふことがなく、單に丈夫調御(或は調御丈夫)といふことになつて居るのはをかしいといふ問があつたのに答へて、龍樹菩薩は、『女は男に従ふが故に、男尊女卑なるが故に、男は事業の主なるが故に、丈夫と言へば男も女も之を攝す』と言ふてをられるのである。

勿論これだけが龍樹菩薩の男女觀のすべてではななく、もつと氣のきいた男女觀を説いてをられるが、

二四
ところで男尊女卑といふことが出たが、印度ではこの男尊女卑といふことが昔からの信仰であつて、古代佛敎の考への中にもこの考へが少し入つて來て居るのである。

釋尊御自身に於かれても、例へば比丘尼、即ち尼僧を敎團中に許すといふことは最初お止めになつた(後にはお許しになつてゐるが)既に佛敎の敎團に屬するものは皆比丘、即ち男僧ばかりであつて、その敎團中に於ける比丘の愛欲といふものを防止し、敎團の清淨を保持しようといふ立場から、こゝに比丘尼の入團を一時禁じられたのである。

勿論比丘尼の入團を許されなかつたことをもつて直に釋尊にも男尊女卑の考へがあつたとは言へないけれども、有り態に言へば、男尊女卑の習慣の跡が残つてゐることは看過するわけにゆかぬのである。

ところがダン／＼後代になると次第に印度一般社會の風潮に従ひ、具體的に男尊女卑の信仰が佛敎界こゝでは丁度數論の男女觀と同じく「男尊女卑なるが故に」といふやうな言葉を使つてゐらつしやるのであつて、さういふことを言つてゐられる場合もあるといふことを申上げておきたい。

殊に重視された印度の嫡男子

以上龍樹菩薩の男子觀の一面を申したので、續いて佛敎そのものに於ける男女觀をお話致したのであるが、佛敎といつても、たゞ佛敎だけでは、なかなか佛敎はわからぬのであるから、如何に印度に於ける佛敎徒が印度傳統の男女觀の問題に苦しみ、如何にしてこの男女觀の問題を解決したかを御諒解願ふために、少しく佛敎以外の印度一般の男女觀といふものを申述べてみたいと思ふ。

印度人(人種的には色々なものが混つてゐるが)一般に萬事を宗教に關係せしめて考へてゐたのであつて、宗教と關係のないものは殆どないと言つてよい。従つて

男女の問題についても宗教といふことを忘れては考へることが出来ない。

印度では男の子のことをブトラ(Dutera)といふのであるが、そのブトラといふ語は印度の古代から非常に大切な言葉として使はれて来た。

何故ならば、少くとも子供がないといふ場合には先祖が地獄へ落ちるといふことが信ぜられてゐたのである、大體印度に限らず、他の民族でもさうであるが、特に印度民族に於ては、家を相続するものは男子である。殊に嫡男子が家の祭を相続する第一の権能者でありまた義務者であつたのである。

世界でも古いと言はれる印度のエーダといふ文學をみると、

「神よ、恵みを垂れて我等に男の子を與へしめよ、神よ、夫をして祭を行せしめ、長くその妻を抱いて幸ある子孫を祖先に捧げしめ給へ」といふ風に男子を産むといふ祈願が非常に強く歌は

れてをる。

また

「男の子生るれば父の義務既に終る」

「男の子が出生して父を喜ばすことは何ものにも超ゆ」

「祖先は男の子の出生によつてその地獄の世界より免る

等の詞があつて、實に男の子は無價の寶であり、萬の倉より男が寶といふどころだつたのである。

凡そ一國の法典といふものは、一時に出来たものでなくて、幾千年來自然に發達し來たところの色々な信仰、習慣といふものを自然に統制して出來上つたものであると思ふのであるが、其の古代印度の法典をみても、かういふことが出てをる。

エーダのそれと同じ意味のものであるが、

「男子を産むや、その父は義務を終へ、不死得」

「父にして有徳の男の子を産めば、代々積り來れ

る罪を免るゝ子を得」

かういふことが屢次出て居る。

さて、この家の祭といふことは、同時に家の相続家の相続といふことは、家の財産の相続といふことにもなつて、祖先を祭り先祖を救済する、その子の行ふ責任はなかく重い。先祖を祭り、先祖を救ふものが男の子で、男の子を産むといふことが家長の義務なのである。

ブトラの信仰を換骨奪胎する

従つてその男の子には財産相続の権利がある。

だから法典の中にもかういふことがある。

「財産を相続するものは祖先を祭る」

これだけだと都合はいゝが併しその次に

「假令相続すべき財産なしとするも、男子はその祖先を祭るべき義務あり」

とある。

宗教的に考へてなかく徹底してをる。

「うちの親父は財産を遺してくれなかつたから墓詣りせぬ、先祖が借金を遺しておいたから子供は先祖を祭らない」

といふことはいけないといふことを、幾千年前の印度で強調して居たのである。

もつと他のいろ／＼な文學を見てみると、ブトラ(Dutera)といふ地獄があるといふことを傳へてをる。

かういふ地獄の相は幾ら調べたつてないのだが、何故ブトラといふ地獄をこしらへたかといふと、前に申した男の子のブトラといふ語は、實はブトラその儘でいゝのであるが、そのブトラをブツトラ、即ち詳しく言へばブツツトラ(Dutera)と見て、先祖がブトラといふ地獄に入つてをるものをトラする——ブトラといふことは救ふといふ意味の語——ものだといふのであつて、ブツツトラが詰まつてブトラとなつたと、かう解釋して居るのである。如何に男の子を大

切にしたかといふことが言葉の上からでもわかるのである。

そしてこゝに面白いことは、祖先が地獄に落ちるといふ場合は、子孫がない場合であつて、子孫が断絶すれば先祖が地獄へ落ちる。その地獄はブト地獄だが、このブト地獄の内容はどういふものかといふと、こゝは餓鬼の世界で、眞ッ倒に足を上にして、頭を下に吊り下げられてゐる地獄、倒懸地獄といふのである。従つてブトといふ地獄は倒懸地獄だといふ風に印度では信じて居つたと思ふ。

さうすると、目連尊者のお母様が倒懸地獄へ入つて居つた、それを救はれたのが目連尊者、その因縁を書かれたのが孟蘭盆經である。

それで佛教に於ける孟蘭盆經は、この印度一般社會に於けるブトラの信仰、これを佛教化して、佛教の立場から、子孫がなくても先祖が救はれるといふ事を説かんがために、印度一般のブトラ信仰を換骨

奮胎して説かれたのが孟蘭盆經であらうと思ふ。

(次續)



法華經講話

(第三十三講)

小林一郎

妙法蓮華經譬喻品第三 (其五)

此より其の譬諭の話の續きであります。

父、諸子の先心に各好む所有る種々の珍玩奇異の物には情必ず樂著せんと知りて之に告げて言く、汝等が玩好す可き所は希有にして得難し、汝若し取らずんば後に必ず憂悔せん、此の如き種々の羊車、鹿車、牛車、今門外に在り以て遊戯す可し、汝等此の火宅より宜しく速に出て來るべし、汝が所欲に隨ひて皆當に汝に與ふべしと

(父知諸子 先心各有所好 種種珍玩 奇異之物)

情必樂著一而告之言 汝等所可玩好 希有難得 汝若不取 後必憂悔 如此種種 羊車 鹿車 牛車 今在門外 可遊戯 汝等於此火宅 宜速出來 隨汝所欲 皆當與汝

父親は自分の子供達が前から好き嫌ひがあつて、色々な珍しい玩具のやうなものとか、或は奇異な變つたやうな品物であればキツトその方に心が惹かれて、是非欲しいと思ひ込むであらうといふことを知つて居ります。そこで子供達に告げて言ふには、お前達は色々珍しいものが好きだが、お前達の「玩好する所」喜んで欲しいと思つて居る色々なものは「希有にして得難し」なか／＼そんなに急に手に入るものではない。欲しいから今持つて來て呉れと言

つても、直ぐ出来はしない。だから有る時に取らないと、後になつて欲しいと思つても駄目だぞ。手を伸ばして取れる時に取つて置く方が宜い。「汝若し取らずんば後に必ず憂悔せん」手に入る時に取つて置かないと、後になつて後悔することがあるだらうと言つた。これは私共が信仰を屬む上に於て善き教訓であつて、時機といふものはサウやたらに來るものではない。「何れその内に……」などと言つて居ると時機は過ぎてしまふ。だから私共は學ぶべき機會が得られたならば、その機會を利用して教を求めらるやうに努めまさんと、今年然るべき機會を外してしまつて、「何れ來年……」などと言つても、來年はドンナ事があるか分らぬ。今日機會があるのを外して、「四五日後で……」と言つても、四五日後には世の中の狀態がどう變るか判らぬから。得られる時を外してはならぬといふこの教は、殊に私共の身の上に於て極めて適切だと思ひます。

それは佛乘の譬論になつて居ります。

羊……聲聞乘
鹿……緣覺乘
牛……菩薩乘
大白牛車……佛乘

「乘」は「のりもの」といふ字ですが、これは教法を言ふ。私共は遠くへ行かうと思へば乗物に乗らなければならぬ。三里か五里なら自分の足で歩けますが、何百里何千里の遠くへ行くと歩いては行けませんから、乗物に乗ります。その乗物を佛の教に譬へる。私共は佛の教を學ぶことに依つて、世の中の面倒な中を越えて平和な生活に入られるのであつて、教といふのは乗物のやうなものですから教法を乗といふ。その乗の中に色々な教があつて、聲聞乘といふのは世の中の無常を觀じて世の中に囚はれないやうな心を作る教。緣覺乘は唯だ教を聞くだけでなく、實際に自分の出會ふ事實と思合せて、「成程

さうして父がいふには今チヨウド好い時だ。羊の挽く車、鹿の挽く車、牛の挽く車といふやうな色々な車がこの門の外にあつて、今ならお前達が行けば自分のものになることが出来る。さうしてその羊や鹿や牛の挽く車に乗れば、勝手に方々遊んで歩くことも出来る。だからお前達は火の燃えて居る家の内にウロウロして居ないで、早く飛出して外へ行きさへすれば、お前達の欲しいものがどれでも得られる。羊の車が欲しければ羊の車も得られ、鹿の車が欲しければ鹿の車も得られる、今ならどれでも得られるのだから、早く行つたら宜いではないか。斯う言つて子供達を門の外に誘ひ出したのであります。

この三車といふのが、佛教の方で申せば所謂三乘といふものに當るので、すなはち羊の車は聲聞乘、鹿の車は緣覺乘、牛の車は菩薩乘、それから此の後に大きい白い牛の挽く車といふのがありますが、

こゝだナ」と思つて世間に囚はれないやうな心持を作らせる教。菩薩乘はたゞ無常を觀するだけでなく世の中の人を救ふことに大なる悦びを感ずるやうな人、即ち菩薩を養成するのが菩薩乘であります。斯ういふやうに教には三種ある譯ですが、それだけでお仕舞ひではない。一番上のものは一切の人間を救ふ力を具へる、それが佛でありますから、その佛の境界に到達することを目的として、修業するのを佛乘と言つて、それが教として最上のものです。だから三乘といふものは、即ち一乘佛に入ることに手掛りである。三乘は遠くへ旅行する時の途中の宿屋のやうなものだと言はれて居る。

そこで父親は羊の挽く車も、鹿の挽く車も、牛の挽く車もあると斯う言ひました。ドウセ難かしいことを言つても相手が子供ですから本當の事は初から解りませぬ。それで兎にも角にも門の前にそんな綺麗な車があるのだから早く出て見なさい、家の内に

ウロ／＼して居たのでは仕方がない。早く門の外へ飛出した方が宜いではないか。さうすればお前達の望み通りの美しい車があるからと言つて、子供を誘ひ出したのです。

爾の時に諸子 父が所説の珍玩の物を聞くに
其の願に適へるが故に 心各々勇銳にして 互に相推排し 競ひて共に馳走し 争ひて火宅を出づ

(爾時諸子 聞父所説珍玩之物 適其願故 心各勇銳 互相推排 競共馳走 争出火宅)

子供達は親の話を聞いて、「さうかそんな綺麗な車があるのか」といふので、そんな車があるなら斯んな所にウロ／＼して居るに及ばないから、外へ出てその車を自分のものにしてしようといふ心持を起しました。「其の願ひに適へるが故に」自分の平生欲しといふので、心も勇み立つて互ひに押合ひへし合ひ

出来て、四衢の道の露地に於て坐つて居る。露地といふのは屋根も何もない往來の道。四衢といふのは四方に通ずる道で、例へば銀座の尾張町のやうな東西南北どちらにも通ずる廣い道の真中です。その真中の所へ子供が出て來たらモウ安心だ。此の四衢といふことは何に譬へたかといふと、四辻の真中に居ればどつちへでも行けませう。だからそれは心が無礙になつたといふことの譬です。チツとも物事に四はれない心持になつた。どんな境界でも満足の出来る心持、これが無礙です、それが悟りの第一歩です。金があるならあるで宜い、しかし無くても困りはしない。地位が高いなら高いで宜い。しかし地位を失つてもガツカリしないといふのが所謂無礙で、「金なんか無い方が宜い」などと言はずともよい。ある時があるので宜い、無くなつたら無くなつたで別の道を立てれば宜い。何も「世の中の幸福ナンといふものは皆詰らぬものだ」と言ふには及ばぬ。「不

して、今までは家の内に居て外に出るのが嫌だつたけれども、美しい車といふのに心が惹かれて競うて外へ走り出た。それで漸く火のついて崩れ落ちさうな家の内を出ることが出来た。

これが所謂佛の方便の教といふことです。初めから難かしい教を説いてもいかぬから、先づ程度の低い教を説いて、さうして大勢の人々が迷つて居る状態から救ふ譯であります。

是の時に長者 諸子等の安穩に出ることを得て 皆四衢道の中の露地に於て坐して 復た障礙無きを見て 其の心泰然として歡喜踊躍す

(是時長者 見諸子等 安穩得出 皆於四衢道中 露地而坐 無復障礙 其心泰然 歡喜踊躍)

子供達が出て見ると、實際そんな車はありはしないのですが、親がさう言つたから子供達はそれを信じて飛出した。その飛出したのを見て、親は始めて安心した。諸々の子供達が安穩に火宅を出ることが

味い物の方が結構だ」などと言ふこともない。美味い物の方が結構ですが、しかし美味しいものが食べられないなら、不味い物で満足したら宜い、それが無礙です。チョウド四辻の真中に居るやうなもので販かな方へも行けば寂しい方へも行ける。繁昌しても宜いし、繁昌しないでも宜いといふ自由自在の心の状態。これを今火に焼かれる家から飛出して四辻の真中に立つたといふのに譬へた。親は自分の子供がさういふやうな四辻の真中に出ることが出来て、さうして其の心も落著いて居る、その様子を見て大に安心をした譯です。

時に諸子等 各々父に白して言さく 父先に許したまふ所の玩好の具の羊車 鹿車 牛車 願はくば時に賜與したまへと

(時諸子等 各白父言 父先所許 玩好之具 羊車 鹿車 牛車 願時賜與)

子供達は美しい車が得られるといふから飛出して

見たところが、車が無いものですから、どういふ譯だらうといふので、「お父さんどうしたのですか、さつき仰しやつたところの自分達の喜ぶやうな品物即ち羊の挽く車とか、鹿の挽く車とか、牛の挽く車といふものが見えませぬが、どうしたのですか。それが欲しいから私共は家から飛出したのですから、どうぞそれを私共に下さい」と言つた。

これは佛の教が拔苦に止らずに、與樂の力が具はつて居るといふことの説明なのです。佛の教は拔苦與樂で、吾々の苦みを抜いて、樂みを與へる。苦を抜くといふのは苦の根本を除くことです。例へば草が生えて居るのを鎌か何かで刈取ると、一時は草が無くなつたやうだが、一雨降ると又生えて来る。それを草の根から取つてしまへば、再び生えはしない。それと同じやうに、私共の苦みを一時救つて呉れても、或る苦みが無くなれば又他の苦みが出来て来るのです。其の苦みの根本は心の迷ひですから、

ふことになる。人々の煩惱を取除かして、更に人の爲、世の爲に力を盡すことを悦びとする、生き甲斐のある生活に入らせるといふことでなければいけません。今私は學校で若い人達を教へて居りますけれども、今の教育といふものはドウモ拔苦の方だけに傾きすぎていけない。斯ういふ事をしてはいけない、あゝいふ事をしてはいけない……いけない方ばかり言つて、良い方はあまり與へない、これでは本當の教育ではないと思ふ。活動寫眞を見てはいけない、新聞を見てはいけない、雑誌を見てはいけない、カフェーに入つてはいけない……いけないばかり言つて居る。それなら死んでしまへば宜いことになる。悪い事をしないのが人生の目的なら、品川の海か何かに飛込んでしまへばモウ悪い事はしないでせう。人間を教へるといふのは悪い事を止めさせるだけではいけない。善い事をして生き甲斐のある一生を送る

その心の迷ひを除いてしまへば、草の根を抜いたやうに再び苦みは起きて來ない。だから佛は拔苦といつて、衆生のために苦の本である迷ひを取除いてやる。しかししたゞ迷ひを除いて、苦みがなくなつたといふことでおしまひなら、人生は意味がない。人間何しに生れて來たか判らない。苦もなければ樂もない、敵もなければ味方もない、儲つても宜い損しても宜い、繁昌しても宜い衰へても宜い、生きて居ても宜い死んでも宜い……それでは人生といふものに全く意味がない。苦みを除いた以上は、樂みを與へなければいかぬ。その樂みを與へるといふのはどんなことかと言へば、世の爲、人の爲に力を盡すことを樂む心を與へるのです。凡て教といふものは拔苦で止つてはいけない、樂を與へなければならぬ。そこで火のついた家から飛出した上は、唯だ飛出さただけではいけない。今度は非常に善い車を與へて、その車に乗らして自由自在に樂みをさせるとい

やうにしてやらなければ、教育の本當の意味はない。活動寫眞を見てはいけない、その代り斯ういふものを見ろと言つて與へなければいかぬ。それが今與へられない。新聞を見てはいけない、雑誌を見てはいけない。それなら何も見ないで居るといふことになつてしまふ。それよりは、そんな話らないものを見ないで斯ういふ善いものを見ろと言つて、善いものを與へなければ教育ではない。チヨウド食物のやうなもので、不消化なものは食ふな、毒な物は食ふなと言つて何も食はせなければ、腹が減つて死んでしまふ。毒な物の代りに良いものを與へてやらなければいけない。そこで佛様は何時でも拔苦與樂で、人の爲、世の爲に力を盡すといふことを悦びとするやうな心持を與へて下さる。そこに佛の教といふものの本當の意味があるのです。こゝは大變面白い。子供は外に飛出したが何も無

いではありませんか、焼かれなくて飛出したといふ
だけではいけません、何か下さるといふのだから、
お約束通り何か下さいと子供が要求した。これは尤
もなことです。親の長者の方も豫てそんなことは考
へて居るから一度危い所から飛出した以上は、本當
に幸福になるやうな物をやらうといふので、大白牛
車と申しまして、大きい白い牛の挽く車をやるとい
ふことになるのであります。

舍利弗 爾の時に長者 各諸子に等一大車
を賜ふ 其の車高廣にして衆寶莊校し 周布
して欄楯あり 四面に鈴を懸け 又其上に於
て幡蓋を張り設く 亦珍奇の雜寶を以て之を嚴
飾せり 寶繩絞絡して 諸の華瓔を垂れ 纒綆
を重ね敷き 丹枕を安置せり 駕するに白牛を
以てす 膚色充潔に 形體姝好にして大筋力有
り 行歩平正にして 其の疾きこと風の如し
又僕従多くして之を侍衛せり

り」とある。高く廣いといふことは人間が大きな心
持を有つことに譬へる。心が狭くてはいけない。高
く廣ければユツクツリして、その中にドツシッ落著
くことが出来る。私共も小さい望みを有つて居る
と本當の努力は出来ぬ。高大なる望みを有つて居れ
ば、その高大なる望みを達する爲には、如何なる艱
難辛苦でも凌げる譯であります。車が高くて廣いと
いふことは所謂佛智見を求めるところを理想として進
むといふ意味であります。詰らぬことを考へて居て
はいけない。高い廣い車に乗るやうな気分になり、
佛様と同じやうな智慧を具へて、一切のものゝ眞實
な相を見ることの出来るやうにといふ希望をもたな
ければならない。これを一番先に仰しやつてある。
小さいことを考へてはいけない、世間の人に知られ
て、世間の人に褒められたいといふくらゐな、そん
なことは何でもない。佛様といふ、一切の人間を救
ふ方と同じになるやうな智慧を具へること、之を汝

(舍利弗 爾時長者 各賜諸子 等一大車 其車高
廣 衆寶莊校 周布欄楯 四面懸鈴 又於其上
張設幡蓋 亦以珍奇雜寶 而嚴飾之 寶繩絞
絡 垂諸華瓔 重敷纒綆 安置丹枕 駕以
白牛 膚色充潔 形體姝好 有大筋力 行歩平正
其疾如風 又多僕従 而侍衛之)

その時に長者は子供の言葉を聞いて、「それは尤
もだ、お前達がこの火に焼かれる家を飛出しただけ
ではいけないといふことは自分にも判つて居る」と
いふので、大勢の子供達に第一に、誰にも平等な、
同じやうな大きな車を與へてやつた。これが即ち佛
になる道を教へて下さつたことの譬です。それは大
白牛車と申しまして、佛は吾々が凡夫の境界からだ
ん／＼進み進んで佛の境界に到達するまでの道筋を
教へて下さつた。之を大きな車を與へられたことに
譬へるのであります。

そこでこの所は一つ／＼の言葉が皆それ／＼に深
い意味を含んで居ります。第一に「其の車は高廣な
の理想とせよと言はれる。それが車が高くて廣いと
いふことの譬であります。何時でも斯ういふ大きい
心持を有たなければならぬ。さういふ大きな心を
有つた人のことを「大心の士」略して「大士」と言
ふ。いつも大きい心持を有たなければならぬ。人
に見せたいと思ふと、人が見なければ嫌になつてし
まふ。世間から報酬を得たいと思ふと報酬がないと
嫌になつてしまふ。大きい心持を有つて居ると、世
間の人が何と言つても構はない。これが根本であり
ますから、先づその車は高く廣いものだといふので
即ち自分が佛の境界に必ず到達しようといふ大理想
を立て、それに依つて修行しろといふのです。

「衆の寶がこれを莊校する」といふのは、多くの
寶を以て美しく飾るといふ意味です。衆の寶といふ
のは何に譬へたかと言ふと、「衆善」有らゆる善事
に譬へる。これも申す迄もないことでありますが、
人間は子供としては親に孝行を盡したい、親として

は子供を可愛がつてやりたい、友達としてはお互ひに信實を盡したいに定つて居る。ところが社會の狀態が色々變化して來るから、折角善い事をしようと思つてもなかく善い事が出來ない。何故出來ないかといふと、普通の教育で教へるやうな善い事といふのは、社會が複雑になると兩立しない。一方の善い事をしようと思ふと片方が出來ない。それで人生の善事といふことが何だか意味が判らなくなつてしまふ。例へば學校の學生が卒業する時に年老つた人が何と言ふか、「お前は長い間親に厄介になつたが今度は卒業するのだから、早く世の中に出て月給でも多く取つて親に安心をさせろ」と言ふ。若い人はその積りになる。それから又他の人は「お前は今度學校から世の中に出るのだが、世の中はどうも間違つたことが多いから、お前は是非正直な道を通つてごまかしたり何かすることは止めろ」と言ふ。これも御尤もなことです。そこで若い人がその氣になつ

て世の中に出て見ると、サアいけない。早く出世をしようと思ふと、少し位嘘を吐かなければならぬことがある。嘘を吐かないで正直にして居ると、何時までも出世が出來ない。早く出世して親を安心させるといふ事と、飽くまで正しい道を行くといふことが衝突してしまふ。今の若い人が墮落するのはそれです。初から悪い者はない。一方の教へて呉れる事と、片方の教へて呉れる事が衝突するから、「どうも面倒臭い、兩方とも止めてしまへ」といふことになる。それで墮落するのである。初めから悪い者はありません。それが、善い事と善い事が兩立しないといふことに出發しますと、ドウモ分らなくなつてしまふ。小僧さんがお使に行くのもさうです。主人が、「早く行つて來い、けれども人に迷惑を掛けてはいけないぞ」と言ふ。早く行かうと思ふと、電車に乗るにも人を突退けなければいけない。早く行かうと思へば人に迷惑を掛ける。若し人に迷惑を掛けまい

と思つて遠慮して居れば容易に電車に乗れない。乗れなければ早く歸れない、どうしたら宜いだらう。小僧さん困つてしまふ。早く行くといふ事と人に迷惑を掛けるなどいふ事が兩立しない。斯ういふやうな有様で、世の中が難かしくなると何も善い事はやらないやうになる。どうしてもこれは其の場合々々に應じて健全な判断をするところの頭を作らなくてはいかぬ。「斯うやれ、あゝやれ」と言はれても、若し命ぜられた通りの事が出來ないと、どうして宜いかわからなくなる。或る場合には人に譲るのも必要でせう。或る場合には氣の毒だけれども人を突退けて電車に乗らなければならぬこともあるでせう。この場合どつちが宜いかといふことは自分の頭で判断しなければならぬ。その頭を作らなければいかぬのです。

來さへすれば、その場合々々に於て一番善い事が出來ますから、親に對しても孝行になりませうし、御主人に對しても忠義になりませう。その根本の心を養はないで、一つ／＼の事を教へても仕様がなないことである。學校で教へる事が兎角實際の役に立たぬといふのはそれです。根本の精神を養ふことをしないで、枝葉を教へて居ても、教へた通りの事は出來やしない、それで廣く大きい車に飾が付けて居るといふのは、常に佛様のやうになりたいと思つて自分の智慧を磨いて居ると有らゆる善い事が出來て來る。自身が進歩して來れば親に對しては孝行な子供となれる、世間に對しては優しい心の人となれる。根本の心を養ふことに努める、さうすればその場合に應じていつも適切な判断が出來る。その事を言つて居ります。

それで佛のやうな智慧が具はればいつでも無礙自在です。自分の智慧が進んで、いつも善き判断が

それから「周市して欄楯あり」といふのは、車の周圍に欄干がついて居る。何もないと車が搖れれば

落ちますから、落ちないやうに欄干があつて之を支へて居る。これは「陀羅尼」といふことの意味です。陀羅尼といふのは支那の言葉に譯すと「總持」であります。總持といふのは「善を持ちて失はず、惡を防いで發さぬ」といふことで、チヨットでも自分が善い事をしたならば、それを持つて失はないやうにして益々その習はしを養つて行くこと、小さい善い事をしたのが本になつてだん／＼大きい善い事をするやうにする。又チヨット悪い心持が起つたら、それを抑へてしまつて發らないやうにする。この事も大切です。チヨウド欄干があれば落ちないやうに、チットでも善い事をしたらその習はしが長く持つやうに、チットでも悪い心持が發つたら、それを止めるやうに、斯ういふ心持が必要である。常に自ら斯う心掛けると共に、又常に人に勸めて此の心掛けをもたせる。これを車に欄干があるのに譬へた。

それから「四面に鈴を懸け」といふのは、鈴の響

きがまはり中に傳はることから、衆生を教化する働きに譬へます。自分が一人覺つて、周囲の人間が迷つて居ても平氣だといふことでは、佛の弟子ではありませんが、丁度鈴の響きが周囲に響き渡るやうに、自分が善い心掛を有つて居て其の周囲の人を教化することが肝要です。

此の教化する、即ち大勢の人を教へるといふに就て、その教へ方には二種あります。言葉の教と行ひの教です。口で言ふのは言葉の教です、或は文字で書くのも此の中に入る。昔は出版などが發達しないから言語を主にして言ひますけれども、今日でいへば著述をしたり文章を書いたりするのも此の言葉の教の中に入つて宜い譯です。併し是は或る限られたる時にやるので、總ての人が言葉の教ばかりやつて居られるものではない。御主人は小僧さんや若い人に言葉の教が與へられるのでありませう。又親父は子供に言葉の教を與へられるでせうけれども、小使

が主人に言葉の教を與へることは出来ない、子供が親に言葉の教を與へることは出来ない。「作此處に坐れ、貴様はこの頃勉強しないから、學校の成績が甚だ悪いではないか、氣を付けろ」これは言葉の教です。ところが子供が親父に「親父はこの頃怠けて居るから商賣が繁昌しないではないか、氣を付けろ」などと言ふことは出来ない。御主人は若い衆に向つて「モット早くしろ、何をぐづ／＼して居るんだ」と言ふことは出来るが、小僧が主人に向つて、「何だつて朝九時頃起きるんだ、モット早く起きろ」などと云ふ譯には行かない。だから言葉の教には限りがある。しかし行ひの教は何時でも誰でも出来る。親父が二日酔して寢て居る時に、子供が早く起きて「お父さん、モウ八時ですよ」と言へば、親父は眼を擦りながら溢々起きて顔を洗ふやうになる。子供は自分の行ひで親父に教へることが出来る。人間の教には言葉の教と行ひの教と二つある。行ひを以て

教へるといふことは、子供が親に教へることも、妻が夫に教へることも、小僧が主人に教へることも出来る譯です。その他、吾々が毎日やつて居る事に魂が籠つて、甲斐々々しく仕事をするならば、周囲の人に「骨折れ」と教へるのと同じである。鈴が車に付いて居て、周囲に響きの及ぶといふのをこれに譬へたのです。

「又其の上に於て徳蓋を張り設く」といふのは、車の上に屋根を張り設けることで、大勢の人を保護する働きに譬へた。無論佛の教を學ぶ以上は、世の中の哀れな者、氣の毒な者を保護して、安全に平和にしてやることに努めなければなりませんから、車の屋根を以て譬へた。モウ少し別の言葉で言ふならば教護のはたらきといふことです。教の方は危く落ちさうな者を救つてやる方。護の方は其の人を平和にしてやつて飽くまでも善くなるやうに、楽しい状態の續くやうに世話してやることです。それを車の屋

根や天井があるのに譬へて、大乘の佛教の修行をする人は、一切の人間を救護する働きをするものだといふことを教へられたのです。

それから「珍奇の雜寶を以て嚴飾せり」さま／＼なる寶を以て飾つてあるといふのは、その場合々々に適切なる善き行ひといふことです。吾々は場合場合に應じて善き行ひをしなければならぬ。即ち時に應ずるといふことが肝要です。時に應じなければ如何なる善い事でもいけない。人に物を與へるにしても、要らない物をやつたのでは仕方がない。夏なら暑いだらうと言つて扇で煽いでやるのも宜いが、冬扇で煽いでやらうものなら寒くて風邪を引いてしまふ。冬なら寒からうと言つて火に當てゝやるが宜いけれども、夏の盛りに火に當てゝやつたのでは堪らない。善い行ひは時に應じなければならぬ。そこでいろ／＼な珍奇な雜寶を以て飾つて居るといふのは、佛道の修行をする者は、その時／＼に應ずる

善い行ひをすべきものであるといふことに譬へたのです。

それから、「寶の繩が絞絡する」と言つて、美しい繩が、車の四方に絡んで居つて、そこに「諸の華鬘を垂れ」とある。車の中央から四方に綺麗な繩を張り渡して、それに飾として美しい瓔珞がついて居る。これは私共の誓願に譬へたので、所謂四弘誓願を、車の四方に美しい繩を張つてそれに飾を下げたといふことで譬へた。四弘誓願は繰返すまでもありませんが、これは片時も吾々の忘れてはならないことです。衆生は數限りなくあるけれども、これをどうぞ皆救ひたいといふ誓願。煩惱は數限りなくあるが、その迷ひはキツト無くなしてしまひたいといふ誓願。法門即ち佛教の教義といふものは色々あるけれども、それをどうぞ學びたいといふ誓願。それから佛に成るといふことはこの上もないエライ事であるけれども、キツト成佛しようといふ誓願。こ

の四弘誓願といふものは、苟くも大乘の佛教を學ぶ者は片時も忘れてはならぬ。この誓願がなくなれば佛教の修行は出来るものではない。衆生は無邊である。その數限りなき人間を皆救はうといふ、そんな事は自分一人の力で出来ることではない。どんなに偉いと言つても、數限りない人間を救ふことは出来ない。しかし皆が自分の出来るだけの範圍で人を救つて、その救ふ働きの働きの連絡して來れば皆を救ふ働きになる。一人の特殊な人を救ふのも、これは結局人類全體を救ふ爲に役に立つのだと思つてやれば宜い。「一人位救つても仕様がな」と言はな

いで、皆が斯ういふ事をすれば人類全體が救はれるのであるから、一人を救ふのでも人類全體を救ふことに貢献するのだと思つてやつて居る。その心持が衆生無邊誓願度といふことです。

それから煩惱が數限りなくあるのを、一度に皆なくしてしまふことは出来ないけれども、一つ宛なくして行けば結局は總ての迷ひをなくすることを理想として先づ一つ宛の迷ひをなくして行くやうに努める。佛道の修行はいつでも大きな理想を立て、その理想に到達すべく一歩々々を運んで行く。千萬里の遠きに行くのでも、やはり一歩づゝ歩いて行かなければ行けない。その一歩々々は、千里萬里の遠くに行くのに役立つ。それが煩惱無數誓願断です。

それから佛の教は盡きることなくして澤山あるから、皆學ぶといふことは出来ないが、一つの教が本當に解れば他は類を以て解るものである。即ち其の一つに魂を打込んで習へば、まだ習はないことの意味までも解つて來る。日蓮聖人も「一切經讀まざるにしたがふべし」と言はれたやうに、一切のお經を讀まなくても大事なお經に魂を打込んで讀んだら、他の經は皆これにしたがつて解つて來る。假令千萬卷のお經を讀んでも、少しも信じないで、宜い加減にやつて居るなら、全く讀まないと同じことで

ある。佛様の魂を打込まれた教を命を懸けて習ふ、さうすれば一切の教を學んだと同じになる。これが法門無盡誓願學であり、それから佛様に成るとはこの上もないエライ事だが、しかし吾々は何かして佛様と同じやうなものに成りたいといふ意氣込があれば、如何に骨の折れる時にも艱難を耐へて修行して行くことが出来る譯です。これが佛道無上誓願成です。

この四つの誓願は、大乘の修行をする者が片時も忘れてはならぬことです。私は何時でも朝起きて顔を洗ふ時に、必ずこの四つのことを考へる。自分達は誦らぬ者が斯うありたい、どうぞ衆生を救ひたい、どうぞ迷ひを除きたい、どうぞ佛の道を學びたい、どうぞ佛様に一步でも近づいて行きたいと考へる。これが自分達の誓願です。その誓願なしに顔を洗つて飯を食べるといふのは、何しに顔を洗ひ、何しに飯を食べるのか判らない。口に出して言はな

ない。坐禪をしないで本當に心を静めれば、禪定を得られる。心が騒いで居つて形だけの坐禪をして仕方がない。私も鎌倉の或る寺へ行つて坐つたことがありますが、唯坐つたゞけでは駄目です。私は鎌倉へ半月ばかり行つて、大分悟つたやうな気分になつて東京へ歸つて来た。銀座の今の服部時計店のある近所に天金といふ天麩羅屋がありました。そこを日の暮に通つたが懐中には十五六銭しかない。早く家へ歸らうと思つて通ると、天麩羅を揚げて居ていゝ香がして来る。「ア、天麩羅が食ひたいナ」と思つたら、鎌倉の半月の修養はスツカリ駄目になつてしまつた。心がシツカリしないでは坐禪だけで悟りは開けない。己れの心を鍊るといふことに依つて、假令坐らないで立つて歩いて居ても自分の心が定まります。それが禪定です。心が定まつて境遇に惹かれないやうな状態になれば、佛様の教もズツと自分の心に滲み込んで参ります。

四四
くても、心持はその心持でなければ、今日の一日は何の意味か判らなくなつてしまふ。それで四方に美しい繩を引渡して飾りを付けてあるといふのは、此の四つの誓願をシツカリと持つといふ意味でありませう。

それから「繩繩」といふのはしどねです。蒲團を重ね敷いて、その上に「丹枕」といつて赤い枕を置いて其の蒲團の上に横になつて休むことの出来るやうになつて居る。蒲團はどういふことに譬へたかといふと、それは人間の心の禪定に譬へる。蒲團の上に着いて寝るといふのは、吾々が禪定を得るといふことであります。禪定とは心が亂れないこと、周圍の事物に心が惹かれて亂れることのないやうになるのが即ち禪定であります。日本では禪宗といふ宗旨が弘まつて、坐禪をするといふ事が教へられましたが、坐禪でもしないと禪定を得られないやうに思ふけれども、坐禪は禪定を得る一つの方法に過ぎ

そこに美しい赤い枕があるといふのは、自分の心に佛のやうな智慧が具はつて来ることです。赤といふことは眞實の意味です。支那でも生れたばかりの子を赤子と言ふ。赤子といふのは、生れた時に身體が赤いから赤子といふのではない。生れた時には人を疑つたり憎んだりする心がないから赤といふ。赤といふのは何も無いことで、即ち邪念がないのです。子供のことを赤子と言ひ、貧乏のことを赤貧と言ふ。赤い貧乏などといふものはないが、貧乏に赤いも黒いもありはしないが、何にもないの意味に赤の字を使ふ。智慧の純粹なものを赤い色にたとへたのも、煩惱の少しも交らぬ正しい智慧といふ意味です。蒲團の上に美しい赤い枕があるといふことは、禪定を得て自分の心が本當に落着いて来ると、正しい智慧が得られるといふことに譬へるのであります。それから「駕するに白き牛を以てす」白い牛といふのは一切の邪念をスツカリ除去去つた心の状態

す。一切の邪念をスツカリ除き去りますと、心が極めて堅固になつて、ドンナ艱難でも冒すことが出来るやうになる、これを白い牛に譬へました。邪念が少しもなくなつた時に智慧が本當の働きをします。其の白い牛の膚の色が洵に美しく、形も殊好といつて綺麗な形である。これは智の働きの殊に勝れたことに譬へる。一切の人を救ふ働きも其の中から生ずる。さうして「大きな筋力あり」筋肉の力が非常に勝れて居る。力といふのは「惑を破する力」で多くの人を救へて其の迷ひを除かせる力です。自分の心が佛様に近いやうになつて行きますと、自分の迷ひが全くなくなる。自分の迷ひを破る人は、必ず他人の迷ひを破ることも出来る。牛が非常な力を有つて居るといふことは、有らゆる迷ひを除く力が大乗の教を學ぶ人には皆具はるといふ意味です。さうして斯ういふ力がある牛でありますから、歩くことはキチン／＼と真直ぐに正しく行く。力のない者は

真直ぐに歩かせぬ。小さい子供に重荷を脊負はしたら歩けやしない、酔拂ひなどは往來を千鳥足に歩いて居る。自分の身を支へる力がなくなれば決して真直ぐに歩けない。それと同じことで心に迷ひがありますと世の中を真直ぐに通つて行くことは出来ない。右に寄つたり左に寄つたり真直ぐな道を通るとは出来ない。正しく歩くといふのは所謂中道を得るといふことです。

中道を得るといふことは非常に大事なことです。私共は總てのものを見る時に、其の正しい所を見なくてはいかぬ。前にも有、空、中といふことを申しましたが、有といふのは差別の方面、空といふのは平等の方面、中といふのは兩者の統一です。いつでも吾々は真中を行かなければいけない。有といふ差別の方にばかり囚はれてはいけない。空といふ平等の方にばかり囚はれてはいけない。差別の中に平等があり、平等のものから差別が生れるのだから、

その両方面を見なければいけない。差別と言へば皆さんの顔が皆違ふ、これは差別です。けれども人間として共通なところがある、これは平等です。同じ人間だから平等だが、しかし顔つきは皆違ふ、これが同じであつたら大變です、家の女房と隣の細君と顔が同じで、どつちがどうか判らなかつたら大變ですから、異ふのも結構です。しかしまるで異つたのでは仕方がない。顔に口があつたり頭の後ろに眼があつたりしては困る。或る程度までは同じでなければならぬ。同じ人間でも智慧のある者も無い者もあり、善い者もあれば悪い者もある。しかし善い人間も悪い人間も同じく佛になれる。これが平等の方面です。それを両方ツツカリ纏めて見るといふのが中道です。牛が道の真中を歩いて行くのはそれです。世の中に處するには真中を行かなくては行かない。何でも同じだと言つて、一切の區別を馬鹿馬鹿しいと貶してはいけません。皆異ふ／＼と言つて偏

つてはいけません。どつちにも偏らないやうに真中を行かなければならぬ。差別に偏る人が世の中に多いと争闘のみ多くなる。老人は老人の方にばかり偏つて、「今の若い者は皆生意氣だ」と思つて居る。若い者は若い方に偏つて「どうも親父は頭が古い」と思つて居る。それは斷じていけない。と言つて唯だ平等になつて、親父でも子供でも同じ人間だといふことにのみ考へればそこにまた弊害がある。異ふ方も見なければならず、同じ方も見なければならず、それで真中を通れる。「行歩平正」といふのはそれを言ふ。本當に佛の教を學んだ人間といふものはいつでも真中を歩いて、自分だけでは無く周囲の人までも感化して同じ正しい道に入れて參ります。さうして、「其の疾きこと風の如し」これは成佛の直道といつて、吾々の佛に成る真直な道といふことです。寄り道をしないでズツと真直ぐに佛の境界まで行く。寄り道をしないといふことは、大乘の教

を學んで行ささへすれば、必ず佛といふ境界にまで行けるので、他の道を習はないでも宜しい。佛様のお心持通りにその教を學んで、その教を修行し、之を實行して參りますれば、それが成佛の直道であつて他のことに心を向けなくても、この道を以て佛の境界まで眞直に進んで行ける。それを牛がズット風のやうに早く駆けて行くのに譬へたのです。此の譬へは大體さういふ意味です。白い牛が車を挽いて行くといふだけの話ですけれども、その中に今申したやうな色々な意味が含まれて居る。私共が佛の大乗の教を學んで、その學んだ結果はどうなるかと言へば、今申したやうな貴いことが現れて来る。若しさういふ風に現れて来なければ、それは自分の學び方が足らないのでありますから、その足らない點を振返つて見て、直して行くやうにすれば宜い譯でせう。

さうして「僕從多くして之を侍衛せり」といふの

得たやうな工合に、有らゆる徳を具へ、有らゆる力を具へることになる譯であります。

所以は何ん 是の大長者 財富無量にして 種の庫藏悉く皆充溢せり 而も是の念を作さく 我財物極り無し 應に下劣の小車を以て諸子等に與ふべからず 今此の幼童は皆是れ吾が子なり 愛するに偏黨無し 我是の如き七寶の大車有り 其の數無量なり 當に等心にして 各各に之を與ふべし 宜しく差別すべからず 所以は何ん 我が此の物を以て 周く一國に給すとも 猶尙置しからじ 何に況んや諸子をやと

(所以者何 是大長者 財富無量 種種庫藏 悉皆充溢 而作是念 我財物無極 不應以以下劣小車 與諸子等 今此幼童 皆是吾子 愛無偏黨 我有如是 七寶大車 其數無量 應當等心 各各與之 不宜差別 所以者何 以我此物 周給一國 猶尙不置 何況諸子)

は、人を教へるのに種々の方便を能く心得て居ることに譬へます。私共が本當に信心して行くと、大なる智慧の力が具はつて、種々無量の方便を以て多くの人を導くことが出来るやうになる。孔子のいはれた通り「徳孤ならず、必ず隣あり」で、必ず感化が周圍に及ぶ。自分にそれだけの力があれば必ず感化される者がある。若し誰も附いて來る者がなければ自分の力が足らないからです。自分の力が具はりさへすれば、附いて來る者が多くあるに決つて居る。

斯ういふやうな美しい車を綺麗な牛に挽かせて、親が子供に與へてやつたといふのは、佛様が斯の如く有らゆる徳を具へ、有らゆる善い行ひをし得るやうなる教を私共にお與へ下さつたといふ譬へで、その長者は佛に譬へ、子供達は吾々凡夫に譬へたのでありますから、吾々凡夫が佛の教を眞心を以て信心して參りますれば、必ずこの大きな牛の挽く車を

何故こんな車をやつたかと言ふと、この大長者は財産が限りなくあつて、種々の藏にも物を貯へて、

その藏は悉く皆充満して居る。さうして斯う思つた、自分の財産や品物は限りなく澤山あるのだから子供が車を欲しいといふ時に、下劣の極く詰らない車の子供達に與へて、それで濟ませる譯には行かない。何故なら相手は子供だけれども、決して子供だと思つて馬鹿にすべきものではない。皆これは吾が子である。皆自分の子である以上は、これを愛するのに偏黨なしで、この子供は可愛いが、あの子供は可愛くないと思ふ筈はない。皆子供は平等に可愛がるべきものである。然るに自分は色々な寶を以て飾つた車があつて、それが一つや二つではない、澤山あるのだから、平等の心持を以てどの子供にも之をやるが當然である、あの子供にはやるが、この子供にはやらないといふ差別を立て、はならない。何故ならば自分はこの美しい車を以て一國の者に皆や

つたところで、それでもまだ、足りないといふこととはないのであるから、況んや子供達にやる位のこととは何でもない。斯ういふ風な心持で、大きい子供にも小さい子供にも皆平等に美しい車をやつたといふのです。

これが佛様の教をお説きになる時のお心持で、佛様は善人に對しても惡人に對しても、利巧な人に對しても馬鹿な人に對しても、結局はお前を佛と同じものにしてやるぞといふ心持で教をお説きになる。あれは馬鹿だからい、加減にしてやれといふことはない。初めは方便を以て説かれるけれども、低い方で止めろといふのではない。低い方からだんたん、高い方に入つて行けといふ御心持です。一切衆生に對して皆佛に成るぞといふ見込を以て教をお説きになる。親が子供に皆美しい車を與へたと同じことで、相手が語らないからいい加減にして置くといふことは人に教へる道ではない。小さい子供だから宜い加

る積りで教を説いて居らつしやるのだから、吾々は一生懸命に修行して行くと、逆も佛には成れないと思つた自分が次第に様様に近づいて行く。「本の所望に非ず」で、自分の希望して居たよりモット大きい幸福が與へられる。これは信心をして見なければ判らぬことでありますけれども、佛様は確かにさう仰しやる。お前達信心をして、本當に佛の教を守つて行けば、前に思ひも寄らない幸福を得る。信心一つで佛に近づいて行けるぞと教へられて居るのであります。

舍利弗 汝が意に於て云何 是の長者 等しく諸子に珍寶の大車を與ふるに 寧ろ虚妄有りや不やと

(舍利弗 於三故意云何 是長者 等與諸子 珍寶大車 寧有虚妄不)

そこで舍利弗よ、お前の心に於てどう思ふか、この長者が等しく諸子に美しい寶を以て飾つた車を與

減にして置くといふことはない筈、ドンナ愚かな者に對しても、彼を佛にしてやらうと思つて説いてやる。親が子供に對して善い車を與へるといふのはその譬へであります。

是の時に諸子 各大車に乗りて 未曾有なることを得て 本の所望に非ざるが若し

(是時諸子 各乘大車 得未曾有 非本所望)

その時に子供達は大きな白い牛の挽く車に乗つたから、未だ曾て覺えないやうな喜びを覺えた。前にはこんな綺麗な車に乗らうとは思はなかつたが、自分の前に望んだところより大きい悦びを得た。これが佛道を修行する者へのみ與へらるゝ幸福です。私共は愚かであるから、なか／＼自分は佛に成れようとは思はない。あなた方はどうですか、私など何だか佛に成ると言はれても、今の自分が佛様に成れさうもないと思ふ。けれども佛様は、私共を佛にす

へたといふのは、嘘を吐いたと言へるかどうか。羊の挽く車をやる、鹿の挽く車をやると言つて、それよりも善いものをやつたのは嘘つきとは言へないだらう。善いものを呉れると言つて悪いものを呉れたら嘘つきであるけれども、悪いものを呉れると言つて善いものを呉れるなら、嘘つきとは言へない。佛は初めには低い教を説いて居るが、それを學んで行くと思ひも寄らない大きいものが得られる。豫期以上のものを呉れたのを嘘つきと言へるかどうかと尋ねられた。

舍利弗の言さく 不なり 世尊 是の長者 但だ諸子をして火難を免れ 其の軀命を全うすることを得せしむとも 爲れ虚妄に非ず 何を以ての故に 若し身命を全うすれば 便ち爲れ已に玩好の具を得たるなり 況んや復た方便して彼の火宅より而も之を拔濟せるをや 世尊 若し是の長者 乃至最小の一車を與へずとも 猶

ほ虚妄ならじ 何を以ての故に 是の長者先に
是の意を作さく 我方便を以て子をして出づる
ことを得せしめんと 是の因縁を以て虚妄無し
何に況んや長者 自ら財富無量なりと知りて
諸子を饒益せんと欲して 等しく大車を與ふる
をやと

(舍利弗言 不也世尊 是長者 但令諸子得免火
難 全其軀命 非爲虚妄 何以故 若全身命
便爲已得三玩好之具 况復方便 於彼火宅 而拔
濟之 世尊 若是長者 乃至不與最小一車 猶
不虛妄 何以故 是長者 先作是意 我以三方
便 令三子得得出 以是因縁 無虚妄也 何
況長者 自知財富無量 欲饒益諸子 等與大
車)

舍利弗が申すには、それは決して嘘つきとは言へ
ませぬ。この長者が諸子をして火難を免れさせて、
その生命を全うさしただけでも嘘つきとは言へませ
ぬ。何故なら火事で焼け死んでしまへばそれきりで

世の中は何も頼みにはならぬ。人生は無常である、
人生の事に心を惹かれるなどいふところから佛の教
へが始まる。さうしてそこから入つて佛の教をだん
だん學んで行くと、永遠の生命の一部分が今日の一
日であるから、今日の一日に於て親の爲め子の爲に
力を盡すといふことは非常に偉大なことだといふこ
とが示されて居る。さうすれば初に言つてある事と
違ふ。これは佛様に欺されたと言つて宜いかと言へ
ば、決してさうではない。初は低い方から説いたの
で、その低い方からだん／＼深入りして來ると、世
の中を厭ふどころではなく、世の中に非常な悦びが
感じられて來る。佛敎の入口の所は厭世です、世を
厭ふべきだと教へてある。しかし深入りして來ると
厭世ではありませぬ、世の中の一つ／＼の事が皆價
値を有つて居る。入口と奥とは違ひますけれども、
入口で欺すのではない。世が厭はしいといふのは、
今の世の中は厭はしい世の中であるから、厭はしく

命さへあれば玩具などは何時でも得られます。
然るに色々な方便を以て火宅から救ひ出した上に、
車までやつたといふのですから、嘘つきどころの話
ではない、洵に有難いことであります。世尊よ、若
しこの長者が假令小さい車一つやらなくても嘘つき
とは言へませぬ。この長者は最初から方便を以て子
供をこの火の中から出させようといふ心持でやつた
のですから、子供を救ひたいといふことが理由にな
つて居るのだから、假令何か呉れると言つて呉れな
いでも、それは嘘つきではありませぬ。況んや長者
が自ら自分の財産の數限りないことを知つて、大勢
の子供に幸福を與へようと思つて、等しく大きな車
を與へて下さつたのだから、それが前の約束と違ふ
からと言つて嘘つきどころの騒ぎではありませぬ
と、舍利弗が申上げた。

私共が佛敎を學ぶ時に於ても此の事をよく考へ
なければならぬ。佛敎の中には厭世的の思想がある

ない世の中にお前達が之を造り變へるが宜いではな
いかといふ意味です。厭はしい世の中を善い世の中
に造り變へることを吾々にお奨めになるのでありま
す。世を厭はしいといふことは嘘のやうに見えるけ
れども、厭はしいと言はなければ吾々は奮發しな
い。是れで結構だと言つたら、泥棒は泥棒をして居
り、嘘つきは嘘をついて居る。結構だと言つてはい
けない。是れではいけないぞと言つて、先づ世を厭
はせて置いて、それからだん／＼更に深く教へ導い
て吾々の力で此の世の中を善くするまで引張つて下
さるのであるから、決して嘘ではない。ところが、
西洋の人などは大抵佛敎の口元ばかり學ぶものです
から、佛敎は厭世敎でいけないと言ふ。詰り半分習
つて居る。獨逸のオイケンといふなか／＼偉い哲學
者ですけれども、やはり其の著書の中に、佛敎は消
極的でいけない、厭世敎であるといふやうに書いて
あります。斯ういふ人達は佛敎の半分しか知らない

から、そんなことを言つて居る。世の中を厭ひきりから、厭ふといふのではない、厭しい世の中だから、善い世の中に造り變へろといふ教が後から出て来る。その後の教を習はないで、佛教が厭世教だと言ふのは以ての外の話です。

佛教を深く學んだら今日の一日が有難くて堪らなくなる。それが本當の佛教です。西洋の人の中に自分が高いといふ自惚を有つて居るから、東洋のものを半分讀んで批評する。すると日本人が西洋人の言つたことは本當だらうと言つて直ぐかぶれてしまふ。佛教は決して厭世教でも何でも無い。世を厭はしいといふのは、厭はしい世の中を厭はしい世の中に造り變へるために先づ厭はしいといふことを説く。チヨウド長者の父親が、お前達外に出れば羊の車があるぞと言つて置いて、さて出て見れば大白牛車があるといふのと同じである。嘘ではない、方便です。入口はさういふものですが、深く入

來亦復如是 則爲一切世間之父 於諸怖畏衰憊憂患 無明暗蔽 永盡無餘 而悉成成就 無量知見力 無所畏 有大神力 及智慧力 具足方便 智慧波羅密 大慈大悲 常無懈倦 恒求善事 利益一切

そこで佛様が言はれるには、お前の言ふ通りだ。佛も其の通りで、即ちこれ一切世間の父である。一切の人間を我が子として見るといふのが、それが佛の心持である。諸々の世間の怖しいことや、衰へ憊み、憂へ苦しみ、それから無明、暗蔽といふのは種種なる心の迷ひですが其等が、スツカリなくなつて佛の心には悩みだの迷ひだのといふものは少しもありません。さうして而も無量の智慧と力と無所畏を成就して居る。無所畏といふのは佛が教を説く時の有様をいふので、畏るゝ所無しといふのは單に怖がらないといふ意味ではなく、他よりして何等の影響をも受けないことです。相手が如何なる人でも、世の中がどうであつても、少しも其の影響を受けない。

りますれば非常に大きな力を與へるのが佛教です。そこで此の事を仰しやつて、舍利弗お前はどう思ふかとお尋になつた時に、舍利弗は頭の良い人でありますから、まことに御尤もであります、皆が迷つて居りますから、先づ方便の教をお説きになつて、結局眞實の教をお説きになつたといふことは結構なこと、初めに方便をお説きになつたのを嘘とは言へませぬと申上げた。

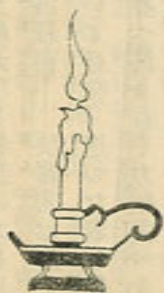
佛舍利弗に告げたまはく 善哉善哉 汝が所見の如し 舍利弗 如來も亦復た是の如し 則ち爲れ一切世間の父なり 諸の怖畏 衰憊憂患 無明 暗蔽に於て永く盡して餘無し 而も悉く無量の知見 力 無所畏を成就し 大精神力及び智慧力有りて 方便智慧波羅密を具足す 大慈大悲常に懈倦無く 恒に善事を求めて一切を利益す

(佛告舍利弗 善哉善哉 如汝所言 舍利弗 如

い。畏るゝ所なく憚る所なくいつも正しい教をお説きになる。さうして大神力と言つて、洪大な不思議な力を具へ、又絶大なる智慧の力も具へて居られる。方便智慧波羅密——波羅密は度と譯するので、「わたす」といふ意味。迷つた者を教化して、彼岸即ち悟つた境界へ渡り着く力を與へる。さうして大慈大悲の心をもつて常に懈倦無く、教を説くことに於て途中で困難に逢つて止めるといふやうなことはない。佛様は唯だ善い事ばかり求めて居る。さうして一切の人間に利益を與へて居るのだと言はれた。「一切を利益す」といふのは短い言葉だけれども貴い言葉です、總ての人間に利益を與へるといふことはなかなか難かしい。私共は一方の人に都合の好いことをやる時に、片方には迷惑を與へて居るかも知れませぬ。電車の中などで自分の友達に會ふ「チャア久し振りでした、サアどうぞ此處へお掛けなさい」と言つて席を開けてやる時には、一生懸命で隣

りの人を押し付けて居る。友達には親切だが、隣りの人には不親切な話です。隣りの人を押し付けて置いて『さアお掛けなさい、掛けられますヨ』とやつて居るのでは本當の親切ではないが、これに似た事が多い。一方の人に利益を與へることが、片方の人には禍を與へることになるのは凡夫の常です。吾々には自分の親しい人には利益を與へても、親しくない人には迷惑を掛けて平氣で居る。一切の人間に誰にも迷惑を掛けないで皆幸福を與へるといふことは、口でいふのは易いが實際は難かしい。吾々も稀には善い事もするだらうけれども、それが他に禍を及ぼすといふことが屢々ある。若し大慈大悲有らゆる人間を救ひたい、有らゆる人間を恵みたいといふ心持であれば、一方に恵んで片方に迷惑を掛けるといふことはない、一方を救つて片方を陥れるといふことはない。「一切を利益す」といふことは極めて平凡な言葉だが、至つて尊い言葉です。それを理想

として、私共も出来るだけ偏ることを避けて行くやうにしなければならぬ譯であります。自分の子供は可愛がるけれども、隣の家の子供はドウでも宜いといふのが所謂凡夫の通弊であります。佛はさうではなく、大慈大悲で一切を利益する。何時でも皆が善くなるやうにどのみ努めて居る。チョウド親が子に對するやうな心持を以て、何時でも總ての人に相對して居る。それが佛の心持だと言つて、此處で佛様の心持を打開けられたのであります。



記事

本部 團報

納涼布教 例年よりも數度水銀柱の昇騰を示した本年の盛夏には、多くの市民は湘南なり房總方面へ出かけて、市中には極く止むを得ざる人々だけしか居残らぬといふ状態に鑑みてそれでは一番納涼布教を試みやうではないかと、教務の幹部の決議に基いて、幸ひ上田理事長の別邸が鎌倉の長谷にあるから、其處を足溜りとして、由比ヶ濱に七百年の往時を追憶するは最も意義深いことであらうと、早速鎌倉署に相談をして先月の七、八兩日午後七時半からオツ始めることに準備した。

好事魔多しといふが、七日は晝頃から俄雨で、それが連々と續いて彌々激しく急にやみさうにもない。鎌倉の方はどうであらうかと電話すれば、馬の背を割るといふ位の驟雨も、愉快やそこも同様のドシャ降り、こんな日はたとへ晴れても夜分の人出は少ないとのことにガツカリ……仕方ない午遣愴明晩に譲ることにして夫れ／＼關係方面へ打合せたが、幸か不幸か小西日喜師ばかり此日早くより外出されて今晚中止のお知らせする方法がつかなくつた。而かも雨は三時半頃か

らあがつて清々とした気分であつたから、小西師は約束通り悠悠と長谷へ御出張下さつて上田理事長及び御家族と、それに横濱の長久保氏後援の下に、由比の濱邊で大師子吼の先鞭をつけられたのは洵に有難い次第であつた。潮風に法衣の袖を翻へしつ、單騎大衆の前に法華經の信仰を叫ばれた師の姿は場所こそ違へ同じ鎌倉の土地であり、蓋し靈感切なものであつたこととお察しする。

超えて八日は和賀義見師、同謙介氏、中村清一氏、磯部理事を始め、宇野博順氏、伊藤喜造氏、池田新一氏、其他石毛西村、高田、佐藤の各夫人達は態々護法の爲め京濱から應援に御出張下さつて、支離旗を先頭に、大太鼓を四方に響かせて、上田邸から程遠からぬ由比ヶ濱邊に練り歩いて毒鼓の縁を結んだ。俗悪化した濱邊には飲食店、賣店、餘興場、活動小屋、角力場等いかにしてか遊覧客を吸引しやうかに鶴の目鷹の目である。かゝる寧ろ遊蕩氣分の群衆に清淨な人生の一大事を與へて覺醒せしめんとする運動は、全く逆を行くものである、従つてその方法なり布教場所なり選定に考慮を要する次第である。

太鼓の音頭に題目三唱、直ちに磯部氏の開會宣言に引續き和賀謙介氏の「立正安國の精神」、中村氏の「釋尊の明教」、和賀師の「日蓮聖人の主張」等連發的血叫びに、濱邊に寄する波の音さへ靜まるかと思はる程の猛烈さ、最後に磯部氏の「宗

山陽山陰線を巡りて

教の價値」を以て定刻九時半となつたので閉會とし、その間約二時間に『佛教の信仰』『統一誌』『教誌』等數百を各應授夫人のお手から頒布された。

來聽中五六の篤志者あつて、明日も是非聞かせて載きたいものです。との懇望もあつた。併し初めの豫定通り今夏はこれで打切ることにした。

凡そ正法布教に就てはいふ迄もなく熱誠と連續といふことが一番大切で、聽衆の多寡は問題でない。勿論出来るだけ効果的に活動して徒勞は避くべきである。今や上下擧つてスポーツに熱狂せる時代、かゝる風潮には一番警告を與へずばなるまい。浮華輕佻に傾き野卑な洋裝婦人共には鐵鎚を下すべきである。世間の動きを知らず顔に涼しさうな敎家の頭には知法思國の熱丸を叩きつけずばなるまい。起てよ我等の同志「日蓮魁けしたり和黨共二陣三陣續けよかし」の御聲は耳に入らずや？！

二本松敎信

七月十五日 社會事業二本松佛教不樂會托鉢修行。

同 廿 日 午前二時三十一分當歸通過にて戰死者遺骨二基

郷里に向ふ因つて出迎へ讀經す。

同 卅 日 蓮華寺にて題目講修行。

八月一日 蓮華寺にて國運隆昌祈願祭を虔修す。

く清潔に拭ひ淨められ、泥靴を入れるには氣がぬするばかりである。直ぐ左手に五十疊程の日本座敷に、先着の若い洋服もあれば和服もある男女が、左右に別れて三々五々各自に夫れ／＼熱誠に祈りを捧げて居る様子は、他の敎會あたりと相當の距りがある。

定刻二分許り前に、黒の背廣服を着た禿頭の三十數歳らしい訪向氏出場して黙禱を捧げ、それから讚美歌や聖書の和唱は彼等の常例で他の敎會と大差はなかつた。而してヨハネ黙示録第三章の一節を力説され、約一時間熱辯を聞いた。かゝる白熱的傳道にこの敎會は他と異つて會員組織の制度もなければ、特別の出資者も持たず、僅かに會合の都度、それからそれへと聞き傳へて集まる人々の一週一回の喜捨に依つて支へられて居るとの事である。此日も百人以上の青年男女、それは殆んど男女相半ばして、それでも若干婦人が多いかと思を受けたが、兎も角毎回百人以上の座席も狭い迄に聚る滿員の大衆が、懺悔と感謝の禱りに終始してゐる姿は、私共にとつて随分考へしめらるゝ點である。殊に聽講の後に三四名の男女から、その際領解したまふを述ぶる有様は、かの佛典の説相を思ひ洵に羨しく感ぜしめられた。

宗教はすたれたといふ人もあるが、信仰を求むる人は決して尠くない、唯これを傳ふべき人が無いことを思ふ。若い男女の狂氣じみた程の求道心は目前に展開されたのであつた。

八月は會館に於ける御書の講座並に日曜例會は前年通り休みなどであるから、この機會を利用してと鎌倉の納涼布教を終つた後始末をつけて、十五日午後七時半神戸行の三等急行に、岐阜行の大川合名、池田君と同車することが出来たので思ひがけない愉快な車中に、譯なく三十年振りで舊友野村君を神戸灘の本宅に訪れた。待ち焦れて驛迄出迎へられたので幸ひ迷子にもならず嬉しい會合が出来た。

同君は先年來宿望の基督教に依つて我が國民精神を善導しやうとの淨念に萌えて、無援孤立その體験の信仰を人々に示し與へつゝある篤志家である。没落を辿りつゝあるキリスト教徒の中に於ても、同君の如き隠れた義人のあるのは流石に日本人哉と歎ぜず居れない、これ今回第一着に訪づれた次第なのである。

十六日、何も御馳走がないから、これだけは是非御參考にしてほしい案内するからと、先に起つて午前十時シャープに始まる同君の行く日曜午前の例會に誘はれて、下山手の日本基督傳道館を見た。そこは數年前迄は日本銀行の一行員であつた訪向氏自身の活動道場なんである。玄關には鍵の手になつた大きな蓋なしの下駄箱が、蠟色に塗られて内外共泥一つな

但しその敎義の内容に關してはこゝに批判することを避けた。兎も角野村君にしてもこの訪向氏にしても此等在家の人達が、専門の牧師の手から離れて行く痛められた小羊を、自己の體験上から我身を捨て、法味を若い人々に與へんとする眞剣さ、かの聖書の『山の上にある町は隠るることなし、燈火は家にある凡ての物を照すなり、斯の如く汝等の光を人の前に輝かせ』といふことを如實に色讀して行く人は、矢張り菩薩であらう。然り圓の行はまち／＼であるが、やがては題目の信仰に誕生することを念願して此等の人等と袂を別つた。

野村夫人のお心の籠つた晝食を頂きつゝ、互に信仰を語りながら絶え間もなかつた、二三日滞在を望まれたが、豫定のあることとて盡きせぬ法話を殘念ながら打切つて夕景、故郷白鷺の城下へ展墓と舊情を温めにと急いだ。

三宮驛見送られた野村君と別れる時ポツリ／＼と降つて來た雨は、やがて姫路では豪雨となつて洋傘位では受け切れぬ程のドンシャ降りではあるが、勝手なもので郷里の雨と思へば濡れても苦にならず、何となく懐しさを覺え濡れるに任かせた。されば幼時お世話に預つた中島家に着いた時は、靴の中も、ズボンもズク／＼であつた。

十七日、我が生母のやうに四十年前から御厄介をかけた中島の御老母は、昨朝から待ち侘びて屢々私共の菩提寺である妙

善寺にお問合せ下さつたとの事、聞いた丈けで思はずホロリ

とした。今朝もわが子のやうに何くれとなくお世話を載いてお華を右手に、左手でお孫さんの四歳になる女の兒の手を引きつゝ打連れてお寺へ御参詣して下さつた。そこには森田上人のいとも御懇切な至誠の籠つた法味を、御實前と墓前に捧げつ、且つこの妙善寺は恩師本多上人の幼時修業された縁の深い淨舎で、その實家國友家のお墓も三基まであり、小林家總墓もあるから、幸に御参詣御回向させて戴いた。

やがて十時半からお隣り妙立寺の施餼鬼會であるから辭去して、次には中島先生のお墓に詣で、大恩を感謝し且つ其の御冥福を祈り、切にお引留め下さつた御老母始め御家族の御芳情にも酬ゆるなく姫路驛へと向つた。老の身もお厭ひなく列車の窓側までお見送り下さつた大恩の中島御老母の御健勝を念じつゝ暫しのお別れをして西下した。

車窓から眺めた懐かしい郷里の自然の姿も、市中を歩いてそれが次第々々に現代文化のメスで破壊されて行くことは何となく惜しまれてならぬ。成住空室だ、滅びず變らぬものは唯だ御佛の國土ばかり！

數時間後、尾道の堀田家に着いた時「電報で着時間のお知らせを待つて居たのでした……」との事で、不意打にお騒がせして恐縮しつゝ、吉和の別邸で首を長くされてゐる御主人の方へ、スツカリ尾道兒となつた力子に手を引かれつゝ案

内された。

十八日、朝から快晴でカヤ蟬の幾匹となく庭園の大樹に鳴くは、直ちに今日の暑さを想像せしめられる。涼しい間にお墓詣りをしやうと堀田の御夫妻に導かれ、力子と打連れ立ち此所で有名な西國寺へと向つた。

二年前、此所に詣でた時は、在京の病妻を氣遣ひつゝ彼女の悲母の墓前に頼いたが、此度は「生れ落ちて間もなく東京に預けられた力坊も、そのおば様の歿後再び實家に歸つたのだ」と確信せる満六歳の少女の、東京のおちさまと纏ひつく。それでも目に入れても痛くない程可愛がられる丈け懸ひ墓にお父様や、一晩も離れては寝られぬお母様の慈愛にいだかれて、先頃からは一人の子供の爲めに家庭の内が一入晴晴しく樂しさうに見受けられて、これでは在京の兄姉達より遙かに多幸の力子よと、墓前に深い「祈と感謝を捧げた。

紅葉のやうな双掌を合せて私の後に随ふ力子と、堀田御主人河本伯父の三つの影に感慨は無量であつた。好機逸す可らずとこの墓地に於て、暫く墓相に就て語る處があつて、大きな刺激を河本の伯父さんに與ふことが出来て嬉しかつた。

本の好きな力子は、歸途お父様におねだりした一年生の参考書を吉和の涼しい座敷で讀んだり、讀んで貰つたりして居るかと思ふとやをら「海水浴に行きませうよ」とせがんだ。

今日は涼しいからこんな日に行く風邪を引くからと聞かされて、素直に「さう」と引下つて折繪や、讀書と共に傍らに出されたお茶受けのビスケットも喰べねばならず、なか／＼忙しい、盛んに飛んだり跳ねたり喜び廻つてゐる。「おぢさんは明日歸る？」「ソウあすは秋の方へ行くので東京とは反對の方です」「ソレダトお歸りには又寄るでしょう」「有難う、こちらの山陽線を通れば寄せて戴きますが、あちらの山陰線へ出れば寄れないのです」「ソレナラこちらへ廻ればよいぢやありませんか」……、傍から河本の伯父さんが、「力ちゃん、東京のおぢさんを覚えて居るかな」と問はれて「ソラ覚えて居るとも」力強くハツキリしたもの……。

夕刻夫人のお心の籠つた氣持ちよいお料理の御馳走を一同共に戴いてから「佛敎の引導」といふことに就て座談的にお話をして、各位の正信増進をお祈りした。

十九日、朝八時四十七分堀田御夫妻の到れり盡せりの御歡待を感謝しつゝ、一同に見送られて三田尻へと發車した。午後二時過ぎ省營バスに乘換へて三國峠の絶景を越へ、漸く六時萩市に到着、そこには小高先生と末永氏親子でお出迎へ下さつて居たので直ちに朝日社に靴を抜いた。三田尻から萩迄の道中に山麓を馳せて秋蟲の鳴く音を耳にしたり、山百合の點々として咲き亂れたのに胡蝶の戯れる姿や、其他薄等の秋色は繪

よりも美しく心を引かるゝこととも多い。併し又或る街道では折角幾百年といふ老松を惜氣もなく伐り倒して居た、それも一本や二本でなく、……別に枯れても居らないものをドム／＼交通の邪魔とでもいふのか伐採するを見てはよい感じは興きぬ。これもお金の爲めか文化病でなければ幸である。

夏の汽車旅行は煤煙に相當惱まされる。末永家で早速入浴させて頂き蘇生の思ひで各位に久瀨を換しつ、今晚の支部座談會次第を聞かされた。始めは公開講演會を催したいから演題を知らずやうと小高先生からお手紙戴いたけれども、聊か考へる仔細もあつて座談の形式に願つたのであつた。

七時過から一同と動行を俱にした後、約一時間「法華經の妙旨」を主題として、今度の神戸に於ける感想やら、帝都ス

ポーツ熱狂のこと並に歐洲の天地を概論して思想戦に對する覺悟を披瀝した。引續いて質疑應答に移つたが、小高先生は病家からの電話に申座するのは止むを得ぬこと乍ら遺憾とされた。

居残つた小學校の先生や、若い青年達の求道心は旺んなもので、宗教と道徳、靈魂の不滅、回向供養のことや其他因果律等に關して十二時過迄も愉快に語り合つた。而して妙蓮寺の富元師も御來授下さつたのは全く有難かつた。

ら末永氏の御案内で先年見送した指月山麓の毛利公居城跡並に有名な花江殿茶室、それは藩公の別邸内にあつた茶室で、安政五年夏、畏くも密勅を拜受されてから、敬親公は深く恐懼感銘して遂に尊王攘夷から討幕に到る密議を夜中秘かに茶事に托して自藩の志士と會談された史蹟である。それから木戸公の舊邸に入つて其の秘密室やかくれ場所其他ゆか下への穿孔や、屋根へ出る釣り天井等を實見して定に一方ならぬ苦心奉公の跡に、今日又この國家多事に際して一入大義に殉ずる志士を憶念し自ら鞭撻された。而してこの木戸公や伊藤公山縣公等の人傑を僅か二ヶ年半足らずであつたが『雖松下兩村誓爲祖國幹』といふ一大信念を以て熱火の如き教育に倚り薫陶された松陰先生を追慕せざるを得ない。私は再び松下村塾を訪ひ其の英靈を慰めた。かゝる大人物を産んだ萩の市民も、今や瀟々として現代を風靡せる物質萬能の思想に染らんとして居る、何に況んや他の地方に於ける歐米化の弊惡は、神州の將來を慮つて最も誠心すべきである。

それから馳せて明倫館に寄つた。日本三館の一として水戸の弘道館、岡山の閑谷館、と共に著名である。明倫館の舊館は一隅に残されて居るが、新館は二千五百の健兒を包容して第二の志士仁人を送り出さうとする努力は、決して尋常一様では行かない。

午餐を小高先生のお招きに預つたが、所狭き迄の山海の佳

肴に、實は日頃一汁一菜主義の自分は面喰ふ許りであつた。そしてかゝる御馳走にも幾倍する貴いものを戴いた。それは先生の護法心から、先頃來萩市で有力な人格者、今日迄眞宗の惣代であつた方が、先生に近づいて驕然として前非を悔い當に改宗されんとしつゝあることで、これは今回の旅行中に於ける第一の御馳走、よいお土産と御同慶至極に存する次第である。

晩七時から朝日社で二回目の座談會が開催された。各位の握られた信心の告白やら、其の得益體験談やら、佛教の欲望觀やら、釋尊の理智悲及び宗教の本質等が論議され、最後に『實在意識の信心』を述べて完結を告げ、十二時散會した。

二十一日、末永氏御夫妻の他事を捨て、専ら私如きものゝ爲めに種々御配慮を委ふし御厚遇を戴いたにも不拘、その奉仕の足らざることを懺悔しつゝ、名残り惜しい萩の市街を早朝から水上氏や其他二三の方々から見送られて、末永氏と同車し東萩驛に來た時は已に小高先生はお待ち下さつて居た。

六時四十八分、一聲の汽笛を發して再會を約しつ袂を別つて山陰本線の初旅を邁つた。

これは海岸線で、西は日本海の碧水も清く、かの山陽線に見る瀬戸内海の點々せる幾多の連嶼はないが、それだけ雄大に男性味を感じる。東には賑々たる山岳巒峯としていかにも

山陰の名に背かぬ、山間の盆地に限なく植付けられた青稻と潤底の桑田に人口の程も略ぼ察知出来る。墜道又墜道と數知れない程澤山の墜道工事こそ其の開通迄の苦心や尊い犠牲を憶へば、その度毎に閉閉する窓の上下などは何でもない。山陽線に馴れた私には本線に依つて旅情を慰撫されたことを徳とする。出雲の大社を遙拜し、鳥取の法泉寺にもお訪ね致したかつたが、時間が許さず残念に思つた。幼い時豊岡から圓山川を下つて令兄と玄武洞を見物した故事も、今は車窓から展望される。日没後七時半、福知山に實姉を訪づれ、久し振りに一夜を語り明して猶ほ盡ぬものがあつた。お互に歳を重ねれば重ねる程いよゝゝ親しき懐しさを激増するもの歟。

二十二日、朝五時半、眠れる町を矯に送られて六時發の京都行に乗り込んだ。大阪、京都市内、名古屋のことは省略しやう。

定に旅は修行である、これがさう急がずにゆつくりと日に制限されずに出來たらばと思ふ。十日足らずに走り廻つた夏の旅にも、事なく豫定通り運んだことは何としても有難い、御佛のお力なくしては及ばぬことである。日蓮聖人の四恩抄に「釋迦如來無量劫の間菩薩の行を立て給し時、一切の福徳を集めて六十四分と成して功德を得給へり。其の一部をば我身に用ひ給ふ。今六十三分をば此の世界に留置て、五濁雜亂

の時、非法の盛ならん時諸法の者國に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日月光りを失ひ天龍雨をくださず地神地味を減ぜん時、草木根莖枝葉華葉等の七味も失はん時、十善の國王も貪瞋痴をまし父母六親に孝せずしたしからざらん時、我弟子無智無戒にして髮ばかりを剃りて守護神にも捨てられて活命のはかりごとながらんものゝ命の支とせんと誓ひ給へり」と。嗚呼思へば思ふ程深大な御佛の御恩徳に何として報恩出來やうか、唯そこにはお思召に叶へる如説修行の道にいそしむあるのみ。噫。

南無妙法蓮華經

—八、二三夜、滿事記—



寄附金維持及團費誌料領收

(自七月二十一日
至八月二十日)

金壹圓貳拾錢也	東京	青山	信市殿
金五圓也	同	高木	三郎殿
金貳圓貳拾錢也	横濱	荒木	運成殿
金拾圓也	東京	井上	道太郎殿
金貳圓五拾錢也	福岡縣	大石	千尋殿
金八拾錢也	横濱	平井	自轉車店殿
金貳圓也	同	久保田	英樹殿
金拾圓也	東京	小金	徳藏殿
金拾圓也	同	何	某殿
金六拾圓也	横濱	中村	清兵衛殿
金貳圓五拾錢也	福島	玉木	久子殿
金壹圓貳拾錢也	水戸	前刀	資清殿
金參圓也	東京	宇野	博順殿
金五圓也	同	山田	英二殿
金六圓也	同	尾崎	熊吉殿
金壹圓五拾錢也	同	濱中	治三郎殿
金壹圓貳拾錢也	大阪	藤原	道子殿
金貳圓貳拾錢也	東京	井上	知孝殿
金壹圓貳拾錢也	同	万城	登殿

金貳圓貳拾錢也	營口	原田	喜八郎殿
金貳圓貳拾錢也	東京	栗山	芳松殿
金貳圓貳拾錢也	同	遠藤	豐次郎殿
金貳圓貳拾錢也	岡山縣	岡野	キヨ殿
金壹圓貳拾錢也	千葉縣	並木	博殿
金五圓也	東京	三吉	顯隆殿
金貳圓也	同	沼部	彌太郎殿
金壹圓也	同	小峰	豊子殿
金貳圓貳拾錢也	千葉縣	廣部	乾山殿
金壹圓貳拾錢也	同	佐世保	島田 貞藏殿
金壹圓貳拾錢也	横濱	京田	爲太郎殿
金貳拾壹錢也	大阪	山口	友男殿
金參圓六拾錢也	廣島縣	村上	信夫殿

拜謝

同信の小泉文柄様が、突然滿洲新京から御音信をお寄せ下さつた處、意外にも御母ノブ子の君は、高田直三郎氏と同月同日八十三歳を以て御長逝遊ばされ、二月後の八月一日には、又御祖父藤三郎氏が續いて御他界遊ばした。その追善菩提の爲め、特に本團の淨業に御清授の思召から、金貳拾圓也を遙々ご御送金下さつた。度て本部過去帳に記入して其の御冥福をお祈り申上ぐ。法號は
惠照院靜室妙延大姉
眞光院靜譽明善居士
南無妙法蓮華經

右難有入帳仕候也
財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改 版	特 價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜 天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛敎の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金參圓廿五錢
日生上人レコード		全	金拾錢
日蓮聖人		全	金貳拾錢
本尊意識に就て		全	金壹圓七拾錢
禪部滿事選輯		特 價	金拾錢
本多日生上人		送 料 共	金壹圓
勸行作法		定 價	金壹圓

河合彰明著

定價 金壹圓
送料共

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六丁目

「教」

發行所

振替口座東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六一ノ七
財團法人統一出版部
振替東京九四二〇番

不許複製

東京市小石川區音羽町六一ノ七
編輯兼 磯部 滿 事
發行人 大辻 松太郎
印刷所 都 印 刷 所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

統一團定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
中々年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ謝金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表不可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新書共直ニ御
通知ノ事
昭和十一年八月廿七日 印刷納本
昭和十一年九月一日 發行
(第四百九十八號)

目 次

法華經の經旨(下篇).....	故本	多日	生
常寂光.....	小西	日喜	
開目鈔講話(第一講).....	小林	一郎	
記事			

○編輯室より



統

法財
八團
統
一團
發行

號月十年一十四第